みらいつくり

第14回 読書会 @zoom

【日時】
2020年10月19日(月)16:00～17:00

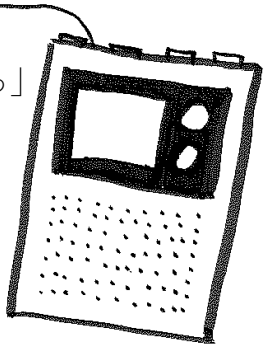
【課題図書】
ソポクレス『オイディプス王』

【参加方法】
興味のある方は、以下事務局までご連絡ください。
zoomのアドレスとパスワードを添付して返信いたします。

事務局：みらいつくり研究所　松井
Eメール：matsui-ka@kjnet.onmicrosoft.com

「ラジオ参加」も大歓迎！

「ちょっと議論には加われない」「その時間は作業しているから」
そんなみなさんにおすすめの「ラジオ参加」。
zoomのカメラをオフにして、ラジオみたいに聞き流す。
そんな「学び」があっていい。そんな「参加」があっていい。
興味のある方はぜひ事務局にお問い合わせください。



みらいつくり大学校企画

みらいつくり大学校企画

第 14 回みらいつくり読書会@zoom 記録

第 15 回は、2020/11/2 の 16:30～17:30 に行います。興味のある方は下記事務局までご連絡ください。

事務局 みらいつくり研究所 松井

E メール：matsui-ka@kjnet.onmicrosoft.com

【課題図書】	【実施日時】	【参加者】
ソポクレス『オイディプス王』	2020/10/19 16:00～17:00	A,B,C,D(＋ラジオ参加 1 名)

内容（※語尾を中心に編集しています）

A：今日は試しにあらすじを板書にしてみました。あらすじをお伝えすることも多いので、ストーリーを軸に登場人物中心にまとめています。前回たくさん人が来てくださっていたのは、時間帯の問題ではなく、課題作品が『星の王子さま』だったからでしょうか。

B：悲劇じゃ無理かー。

A：そしてギャップがすごいですもんね。『星の王子さま』から『オイディプス王』ですから。でも素晴らしい作品だと読んで思いました。私は読んで、やはり劇として観てみたいと思いました。演劇としてこの本がどうやってつくられるのかについて興味があります。途中にある歌の部分については飛ばしながら読んでしまいましたが、歌を入れて演じたら迫力もあるだろうなと思いました。私は『海辺のカフカ』を読んだことがありません。今回『オイディプス王』を読みながら、『海辺のカフカ』も読みたいなと考えて検索をすると、『海辺のカフカ』を蜷川幸雄が演劇にしているという記事を見つけました。演劇としてつくられた『オイディプス王』を村上春樹が『海辺のカフカ』として小説化し、そしてその小説を蜷川幸雄が演劇化しているということです。とても興味深く、いつか観てみたいと思いました。内容について、私が興味をもったのは、神観についてです。私はどうしても聖書と比較をしてこの悲劇を読んでしまいます。『オイディプス王』を読むと、聖書が預言者の目線で書かれていることが多いんだなと改めて感じました。王の目線で書かれることはあまりないように思います。逆側から書いたらどうなるだろうと考えながら、聖書の読み方にもつながると思いました。神観についていうと、イスカオテについて気になりました。イスカオテはオイディプスの母であり妻です。色々な人たちがアポロンを中心とした神について述べていきますが、イスカオテは他の人たちよりも神を疑っているように感じました。予言というものを疑っています。「本当の予言のわざなんてないんだ」というようなセリフがあります。「運命の支配が全てだ」とも語っています。つまり運命論者として描かれていると言って良いと思います。『オイディプス王』に出てくる全ての人がアポロンを信じているわけではなくて、運命論が入り込んでいます。そんな部分が面白いなと思いました。

C：私は今回読んでいません。今回の本が今までと違うのは、Wikipedia にとても詳しく載っているんです。他のサイトでも詳しく内容について触れていました。それだけ有名な本なんだなと思いました。サイトには「フロイトの先入観が」とか書いてありましたが、私はそんな先入観はありませんでした。先ほど A くんが言うように蜷川幸雄さんが演劇にしていると書いているものもありました。すごく有名な話なんだなと思いました。私も劇の方を観てみたいです。頭が人間で足がある…。

B：スフィンクスですね。

C：そのスフィンクスは、私の大好きな『ネバー・エンディング・ストーリー』にも出てくるんです。そういう神話は、映画の中でも使われているんだなと思いました。『ネバー・エンディング・ストーリー』はミヒャエル・エンデが書いた本ですが、引用されているところを見ると、今回の課題作品が元ネタになっているものも多いんだなと思いました。どのサイトにも「一回は読んだほうがいい」と書いてありました。「いつかは読みたい」と言ってしまうと、「いつか」は来ないのかもしれませんが、読みたいなと思いました。個人的にはこのカタカナの名前は頭に入ってきづらいなとも思いました。しっくりはきませんでした。以上です。

D：僕は光文社で読みました。河合さんという人が訳しています。人物相関も載っています。系図が載っていました。筋がわかった自信はあまりないのですが、入り組んだ話ではないような気がします。ただ、途中で歌が入ったりとかする文法に慣れないと、よくわからないところもあるなと思って読みました。僕はこの『オイディプス王』には作者がいないと思っていたんだけれど、しっかりいるんですね。ソポクレス。ギリシャ悲劇の巨匠なんですね。河合さんの解説が面白かったです。「ギリシャ悲劇演劇祭」のようなものが当時あって、そこで 18 回優勝しているという記録が残っている人のようです。120 以上書いた劇の中で現在残っているのが 10 もない。ほとんどが失われた資料になっているんですね。書かれた時期が紀元前なので、解読も、当時使われていたギリシャ語と今使われているギリシャ語があまりにも違うので、今のギリシャ語で韻を踏んでいなくても当時ならば踏んでいることがあるようです。当時使われているギリシャ語ではこのニュアンスではないということもあるようです。新約聖書を読み解いていく感じ、訳すること自体が読み解きなんですよね。そんな意味で勉強になりました。物語という意味では原点ですよね。これより古いものって、『イーリアス』とかになってきます。『ホメロス』とか。シェイクスピアにも目をつぶす話が出てくるらしいのですが、これを意識していると書かれてもいました。色々なものの元ネタになっているんだなという感想ですね。ギリシャ悲劇という分野については知っていましたが、初めてそのものを読めてよかったなと思っています。ギリシャ悲劇は「運命劇」であると言われます。平野啓一郎という作家がいます。芥川賞作家で『マチネの終わりに』という本を書いています。映画化もされています。すごく面白いです。一生懸命読みました。音楽家の話です。福山雅治で映画化されました。

B：映画も見たということですか？

D：映画は見ていません。小説を読みました。小説がすごく面白かったです。音楽家の話です。平野啓一郎は蒲郡の出身で、僕と同じ町の出身です。僕よりも若くて、蒲郡からすごい人が出てきたなと思っているんです。

B：ギリシャから蒲郡の話に飛びましたね。

D：蒲郡って、愛知県の中でもマイナーです。蒲郡って名前からして、濁音が二つも入っている…ダサいというか。北海道でいうと…。

B：僕も濁音二つの出身だから親近感ありますよ。

D：蒲郡ってなんだか「おじいさん」ですからね。そういう自虐もあって「蒲郡からなんの良きものが出ようか」そんな気持ちがあるわけです。最近すごいのは、千賀というソフトバンクのエース、日本のエースがいます。彼は蒲郡高校出身なんです。平野啓一郎と千賀。

B：「蒲郡神話」の話になってきましたね。

D：なんの話をしていたんでしたっけ。それで、平野啓一郎が書いた『マチネの終わりに』の中のヒロ

インも主人公も国際派なんです。中東戦争を取材している記者だったり、お父さんがアメリカに住んで映画監督をしていたりしています。ヒロインがアメリカに住んでいるお父さんと話すシーンがあります。その中で、そのお父さんがヒロインに言ったセリフが僕の中ではずっと心に残っています。19世紀・20世紀に人が物語を書くときには、それらはずっと「英雄劇」であったというんです。要するに人が運命を変えるという話なんです。『ロード・オブ・ザ・リング』にしても『ナルニア国物語』にしても。それ以降ずっとそういう話だと言うんです。『はてしない物語』もそうですし。英雄譚が描かれ続けたんだと。「ここへ来て人類はもう一度『運命劇』に戻ろうとしているのかもしれない」、みたいなことを言うんです。それは、この時代には、あまりにも一人という人の力が無力で、むしろこの世の中というものに人が翻弄されていく、そんな時代に「英雄劇」は人の心に刺さらなくなってきている。それはあまりに現実と違いすぎるから。むしろ、ギリシャ悲劇のような「運命劇」のようなものを、人は求めるようになっていると思うのだ、と言うんです。それを読んで思い出したのは、村上春樹です。村上春樹は、いつも運命劇を書きます。主人公の主体性は何もありません。本当に常に流されていく人の話なんです。そして彼が『オイディプス王』をモチーフにしているというのは必然なんだなと思っています。元ネタを読んで、運命というものから逃げられないという話なんだと思いながら読みました。そんな感じです。

B：めちゃ面白く読みました。僕もギリシャ悲劇を初めて読みました。『オイディプス王』が「エディプス・コンプレックス」の始まりであるというのは知っていたけれど、読んでいませんでした。むしろ読まねばならないギリシャ神話ってどちらかというとホメロス『イーリアス』『オデュッセイア』です。岩波から分厚い本で出ているんです。そっちはどこかで読まねばならないと思っていました。『オイディプス王』は実は三部作なんですよね。『オイディプス王』が第一部です。そして『コロノスのオイディプス』が第二部。第三部が『アンティゴネー』です。要するに、一作目は、オイディプス王が知らずに自分の父親を殺し知らずに自分の母親と交わってしまったという話ですよね。そして自分の目をつぶして神託通りに街を出ていく話です。『コロノスのオイディプス』ではオイディプス「王」ではなくなっています。王ではないからです。テーバイから出て行った盲目のオイディプスと、娘のアンティゴネーが出てきます。アンティゴネーは娘であり妹なわけです。その娘に手を引かれて、コロノスという街に行きます。そこにはテセウス王というのがいます。こないだテレビでやっていましたよね。

『テセウスの～』

というドラマがありました。

C：ドラマやっていましたね。

B：ギリシャ系の名前をつけるのが好きな作家がいますよね。『アリアドネの～』とか。あの辺りで「なんだろうこの名前」と思うものは大抵ギリシャ神話から来ているんですよね。初めて知りました。第二部は、オイディプス王が死ぬまでを描いているんです。でも第一部のオイディプス王とキャラクターが全然違うんですよ。

A：話としても続いているんですよね。

B：続いているんです。いわゆる権力欲とかがないオイディプス王のところに、息子たちが来るんです。オイディプス王が無意識にではありますがそんな悪をおかしたということになっています。またデルポイの神託を受けます。ギリシャ悲劇って大体神託を受けますよね。先ほどDさんが言っていましたが「運命的」です。神託に逆らえないから、それらに人間がどのように翻弄されるのか、という話です

よね。そこで与えられた神託は「オイディプス王が死んだところが栄える」というものです。だから、息子たちが自分の父親を追放した時には何もしなかったのにも関わらず、自分たちの街で死んでくれたら自分たちの街が栄えるから、一緒に来てくれと言うんです。自分のところで死んで欲しいんです。だけど、オイディプスは息子たちのところには行かず、コロノスのテセウス王が素晴らしい王として描かれ、オイディプスはコロノスで死にます。死ぬシーンがまたドラマチックというか劇的なんですよね。死ぬシーンだけは出てこないんです。それまで死に至るシーンを描写しているんですけど。最後、第三部は『アンティゴネー』です。オイディプスと一緒に行った、目の見えないオイディプスの世話をしていた娘の話です。アンティゴネーには兄が二人いるのですが、その二人はテーバイの国を自分のものにしようとして戦い、結果、相討ちをしてしまいます。両方死ぬんだけど、クレオンというおじさんが弟の側についてしまうんです。そして良くないと思っていた方に対して、埋葬もしてはいけないとおふれを出すんです。犬とかカラスに食われるままにしておけ、と。埋葬をした奴は罰するといいます。でも、アンティゴネーは、自分の兄をそのような死に方はさせられないと言って、戻って土をかけるんです。それをクレオンに見つかって死刑になりそうになる。でも周りの人たちがそれを止めようとするんです。第一部『オイディプス王』の時にはクレオンはそこまで悪者としては描かれていませんよね。

A：別に悪い人ではなかったように思います。

B：なのに、三作目になると、やたらと権力欲が強くなるんです。「なんでお前らは俺のいうことを聞けないんだ」と頑固になっているんです。まるで『コロノスのオイディプス』に出てくるオイディプスとは正反対です。周りの人がいろいろ言うのですがクレオンは全然話を聞かない。ハンモーンというクレオンの息子がいるのですが、そのハンモーンはアンティゴネーと婚約をしています。自分の義理の娘になる予定だったアンティゴネーを死刑にしようとしているわけです。そして自分の息子がそれを止めようとしている。止めようとする方法が理詰めなんです。その親子のやりとりがとても面白い。でも父は聞かない。最終的に父クレオンは考えを変えるんですが、それはまた神託によるんです。突然予言者が出てきて、予言者が言うと「やはりだめだ」となる。考えを改めて、アンティゴネーを死刑にすることはやめにしようとする。「しょうがないか、神託だったら」というようにして言うんですが、その直後に息子のハンモーンが自殺をするんです。自分の許嫁がこれから死刑になるんだと思って悲しんで自殺をしてしまうんです。結局その後にアンティゴネーも自殺するんです。まさに「なんたる悲劇」という感じなんです。三部作を通してみると、人間の権力欲とか、仏教的にいう「業」が描かれているんですね。運命に翻弄される人々はもちろんなんですけれど、歳によって変わってくるんです。特にオイディプス、そしてクレオンが変わります。アンティゴネーも変わっていくんです。アンティゴネーはむしろ運命に抗って戦おうとするんです。その辺りが、三部作を通して読むとめちゃくちゃ面白かったです。そして皆さんに一番おすすめなのは、三作目の『アンティゴネー』です。三作ともに訳者が違うからなのか、三作目は訳が一番新しいからなのか、作ごとにキャラクターが変わっているんです。三作目では、女の人であるアンティゴネーは男の人みたいな話し方をしています。アンティゴネーとクレオンとのやり取りとか、クレオンを諭そうとする息子のハンモーンのやり取りとかがとても面白いので、買って借りて読んでいただいたらと思いました。

C：会話が面白い感じなんですね。

B：『アンティゴネー』は特にそう思いました。『オイディプス王』はだんだんとわかっていく様子が面

白いですよね。『アンティゴネー』は完全に舞台向きです。これも誰か舞台化していると思います。これを翻訳した人も、舞台を見て、その感じにしたいと思って書いたとありました。その舞台に出ていた人は、岸田今日子さんです。昔、『ダウンタウンのごっつええ感じ』に出ていたと思います。
D：知らないですね。
C：あー。
B：ごっつに、おばあちゃん役として出ていたじゃないですか。あの人が別な役をしているのを見て、その口調でアンティゴネーの役をつくりたいと思ってそれでつくったとありました。みらいつくり読書会番外編で、朗読会をやりたくなるくらい、掛け合いの面白さがありました。
C：『渡る世間は鬼ばかり』みたいですね。
B：そうそう。
C：会話のやりとりが面白いっていう。
B：場面がずっと変わらないんです。
C：場面が変わらないけれど親族同士でずっと言い争っている。最後妙に納得するけれど…といったかんじです。
A：『オイディプス王』では、神託が絶対的なものとして前提にありつつ、イスカオテは予言を疑っていますし、人々の中に予言がそのまま成らないであって欲しいという願いもあります。第二部、第三部では、もっと絶対的なものとして神託は扱われているのでしょうか？
B：予言がですよね。そうだと思います。だからサスペンス的な要素は二部三部では無いです。『オイディプス王』に思いっきり重ねている映画があります。韓国の『オールド・ボーイ』ってありますよね。主人公が「オ・デス」と言いますが、あれはオイディプスの略です。
D：『オールド・ボーイ』って日本の漫画が原作ですよね。ちがいましたっけ。
B：そうですね。めちゃくちゃ気持ちの悪い映画です。あまり観ることをお勧めしないのですが、映画としてはめちゃ面白いです。あれはお父さんと娘が知らないうちに交わってしまうという話です。それに気がついたお父さんがハサミで自分の舌を切るっていう。『オイディプス王』を若干デフォルメしているんですね。
A：『オイディプス王』はとても面白かったのですが、今までの読書会と違って「何を批判したのだろうか」というような話にはなりませんよね。原典の原典というような話ですもんね。
D：そもそも当時の社会状況なんかもわかっていないことが多いですよね。ポリスとか…。ソクラテスが活躍した時代と重なっていますか？
B：少し前でしょうか。
C：少し前と書いてありました。
B：重なっているのかな？
D：ピタゴラスはソクラテスよりも前ですよね。
B：多少は重なっているかもしれませんね。何百年という話だから重なっていないかもしれませんが。
A：アリストテレスが批評をしたと解説にありました。
D：書いてありましたね。
B：『詩学』の中で、ですよね。
A：そんな時代感かと思います。

B：書いている途中で、スパルタクスにアテネが負けているんです。『コロノスのオイディプス』のベースには諦め・諦念みたいなものがあるんだけれど、没落していく都市に対する諦念はアテネがスパルタに負けたというものと重なっていると書いてあるものがありました。
A：岩波の解説には、疫病の大流行は当時のアテナイであったのではないか、と書いてありました。
B：そうですね。
A：このくらいしか時代のことは書いてないように思いました。古いから難しいんですね。
B：『オイディプス王』が悲劇祭のようなもので１位ではなかったんですよね。２位だったんですよね。なんとか大会のようなもので。そんなことが書いてありました。
A：優勝を逃した、とありました。
B：また、演劇として演じられたのは『アンティゴネー』が先なんですよね。確か『オイディプス王』が後のようです。A くんが読み飛ばしたと言っていた歌の部分ありますよね。その中に、ギリシャ神話の話がたくさん出てきています。ギリシャ神話を知っていると、コロスの部分も含めて面白いんですよね。コロスの話を聞いて「このギリシャ神話が登場するということはこの後こうなるのね」というようにわかるんだと思うんです。
A：私が全然わからない部分なんですが、ギリシャ悲劇とギリシャ神話の関係はどうなっているんですか？
B：ギリシャ神話が先にあります。ギリシャ神話は口頭伝承です。聞き伝えであるはずです。
D：テキストがあるわけではないということですか？
B：ないです。つまり、ギリシャ神話は作者がいないんです。日本書紀とかと似ているんでしょうか。
D：古事記とかですね。
B：それをたまたま誰かが編纂した、途中でまとめてつくったことはあると思います。
D：ギリシャ神話については、断片的なものはちらほら読んだりするのですが、全体として何なのかというのは全然わからないです。ナルキッソスは自分に見とれて…とか、シュシポスは永遠に労働をする…とか。その手のものは断片としてはいろいろあるんだけれど、全体としてはどういう話なのかは全然知らなくて。スサノオと誰がとか、何度も聞いているのですが、何回聞いても頭に入ってこないというような感じと似ているのでしょうか。
B：岩波新書に『ギリシャ神話』というのがあるんですよね。そんなに分厚くないです。多分『オイディプス王』の 2 倍くらいかな。劇とかではなくて、神話に出てくる登場人物について「この登場人物は～である」というふうに書いてあるんです。例えば、ヘラクレスとか、火を盗んだと言われている…。
D：プロメテウスですね。
B：プロメテウス。プロメテウスも 4 行くらいしかなかったように思います。原発事故の後に、朝日新聞に「プロメテウスの～」というような連載がありました。そんなギリシャ神話の名前が登場した時に、誰かが知っていてかけているんだろうな、と思っていましたが、ちょっと知ると「あれね」と思えますからね。だから『ギリシャ神話』とか、ホメロス『イーリアス』『オデュッセイア』を買ってきました。あれはトロイア戦争の話なんですよね。あの辺から知らないと、シェイクスピアとか現代の文学を本当の意味ではわからないんでしょうね。
D：そうなんですよね～。西洋というものを理解するには「聖書」と「ギリシャ神話」と「ギリシャ哲

学」の三つがコーナーストーンなんだという話がありますよね。
A：ちなみに、ユダヤ教とギリシャ神話やギリシャ悲劇の関係はどうでしょうか。ユダヤ教からすると、ギリシャ神話は異教として聖書の中には書かれていますよね。それがギリシャ神話ですよね。その辺を理解できると、聖書を読むにあたっても良いんじゃないかなと思ったんです。
B：それらが交わったのがアレクサンダーですよね。アレクサンダーが東方に進出しました。ギリシャから見るとユダヤって東方だから。アレクサンダーが最終的にインドまで行って負けますよね、その途中で行っているのがユダヤの関係の国々です。マケドニアとかそうですよね。そこで交じって、ヘブライニズムとヘレニズムが合体しているというのが、そこで起こっているはずです。そしてアレクサンダーの家庭教師がアリストテレスだったんですよね。ということで、アレクサンダーのことも勉強したくなりました。どんどん勉強したくなっています。
D：『ギリシャ哲学 30 講』という本を、B さんが哲学学校で紹介していました。あれの上巻を読みました。めちゃくちゃ面白かったです。まだ下巻は読んでいませんが、彼はハイデガーをベースにギリシャ哲学を読んでいるんです。彼は一つの仮説を立てていて、ソクラテスが原点ではないというんです。ピタゴラスとかもっと前です。ヘラクレイトスとか。ヘラクレイトス系とソクラテス系がギリシャ哲学の大きな潮流であると。ヘラクレイトスは「万物流転」と言いました。自然哲学なんですよね。人間が社会をどうこうできるものではないということなんです。中国で言うと老荘思想なんです。都市の哲学ではなく田舎の哲学です。それに対してソクラテスは徹底的に脳の中の話をするんです。つまりそれは都会の哲学であって、主観性と彼は呼びますが「我思う」ということを言ったのがソクラテスです。ヘラクレイトスからくる元々のギリシャ哲学は自然哲学であったと。つまりハイデガーは主観性に汚染される前のギリシャ哲学をもう一度復元しようとしたんだと言うのが彼の読み方です。すごく面白かったです。じゃあ主観性はどこから来たのかというと、実はそれは東洋からであると言うんです。
A：へー。
D：それはゾロアスター教とかであると。ゾロアスター教って陰と陽ですよね。つまり二元論なんです。二元論というものをアレクサンダー大王があの流れの中で東洋から持ち込んだ。その流れがギリシャ哲学に入ってきた時に「我思う」が混入したんだと言っていました。めちゃくちゃ面白かったです。
A：『ギリシャ哲学 30 講』ですね？
B：前に紹介しましたよね。ハイデガーをベースにしてギリシャ哲学を読んでいるので。
D：ハイデガーの副読本としては最高だなと思いました。
B：プラトンが主観性の哲学というものをある程度完成させて、アリストテレスはそれを批判しようとして自然哲学に接近する。中世キリスト教って巨大な主観性として神をも想定しているじゃないですか。そことくっつく形で西洋哲学の源流ができてきたという話ですよね。ギリシャ哲学というとソクラテスやプラトンを指しますが、ギリシャ神話は日本の八百万の神と近いような気がしますね。そういう意味で、こちらも読むといいですね。あとはニーチェですね。ニーチェのデビュー作は『悲劇の誕生』といってギリシャ悲劇について書いているんです。時々、アポロンとかディオニソス的な～というんです。
D：ディオニソス的な～とよく言いますよね。
B：ニーチェは、ディオニソス的なものとよく言っています。そこで出てくるのがバッカスというお酒

の神ですよね。ニーチェはそちらを分析しました。ハイデガーとは別な形でキリスト教を含む主観性を批判しようとしていたんですよね。人間の主観が色々なものを作り上げているんだと。『ツァラストラはかく語りき』のツァラストラはまさにゾロアスターのことですからね。ゾロアスターのような人が出てきて、超人にならねばならないと言ったんですよね。ハイデガーは詩作に行きましたが、ニーチェは人間をさらに究極形態にするためにはと考えて「超人」に行きました。そんなふうに絡んでいますね。

A：私はその辺りが分からないから。世界史も含めて私の苦手なところなんです。わからないままにしちゃっているところだから勉強しなきゃと思いました。

B：トロイア戦争とかも僕は全然知らないんです。世界史をとっていないから。世界史では出てくるんですよね？

D：出てくるでしょう。

B：トロイア戦争は世界史の史実的にはなかったと言われているんですよね。でも実はあったという説もある。

D：パンドラの箱、というのもそこの話ですか？

B：パンドラの箱はギリシャ神話に出てきますよね。思い出したけれど、ナウシカも出てくるんですよね。

C：へ～。

B：『イーリアス』に。『オデュッセイア』だったかな。宮崎駿自身が「ナウシカはギリシャ神話からとった」と言っているんです。そして、そこから派生してナウシカも買って読みました。

D：そこは「沼」ですよ。

B：D さん読んだんでしたっけ？

D：全部は読んでいないですよ。深入りしてしまうだろうなと思っています。めちゃくちゃ面白いらしいですね。

B：一気に七冊全部読みました。あれはもう映画とは全く別物ですよね。

D：映画は序の口なんですよね。

B：映画は 2 巻までなんですよね。巨神兵とかは全然動かない。最後にならないと動かない。クシャナ王が「焼き払え」と言います。あれはないんですよね。

A：私が小学生の時に、漫画が家にあって読んだら、怖くて映画は見られなくなりました。

B：怖いですよね。あれもギリシャ神話を下敷きにしているんだろうなと思うところがありました。クシャナ王は女性ですが、上にお兄ちゃんが二人いるんですよね。なんとなく『オイディプス王』っぽいんですよね。

A：そろそろ時間ですね。『オイディプス王』から先に進むとまずいということがわかってきたので…。

D：「沼」ですね。

A：ハマっていくのみで世界を全然旅できないので…。

C：旅できない。

B：確かに。

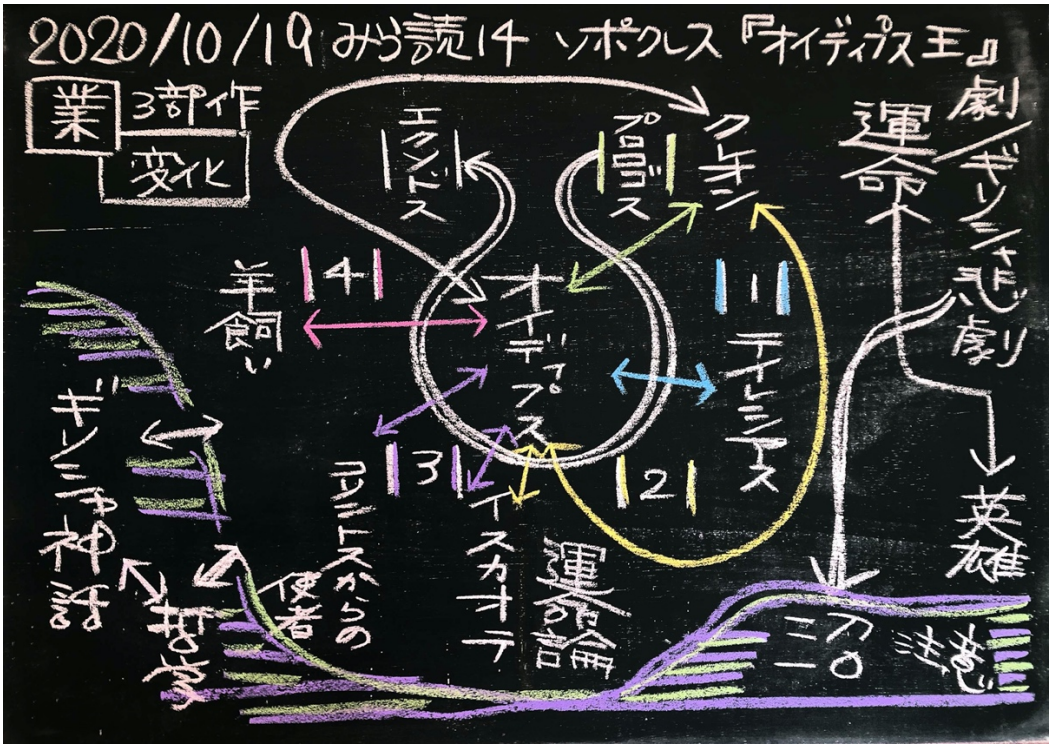
A：次のこと考えてもいいですか？

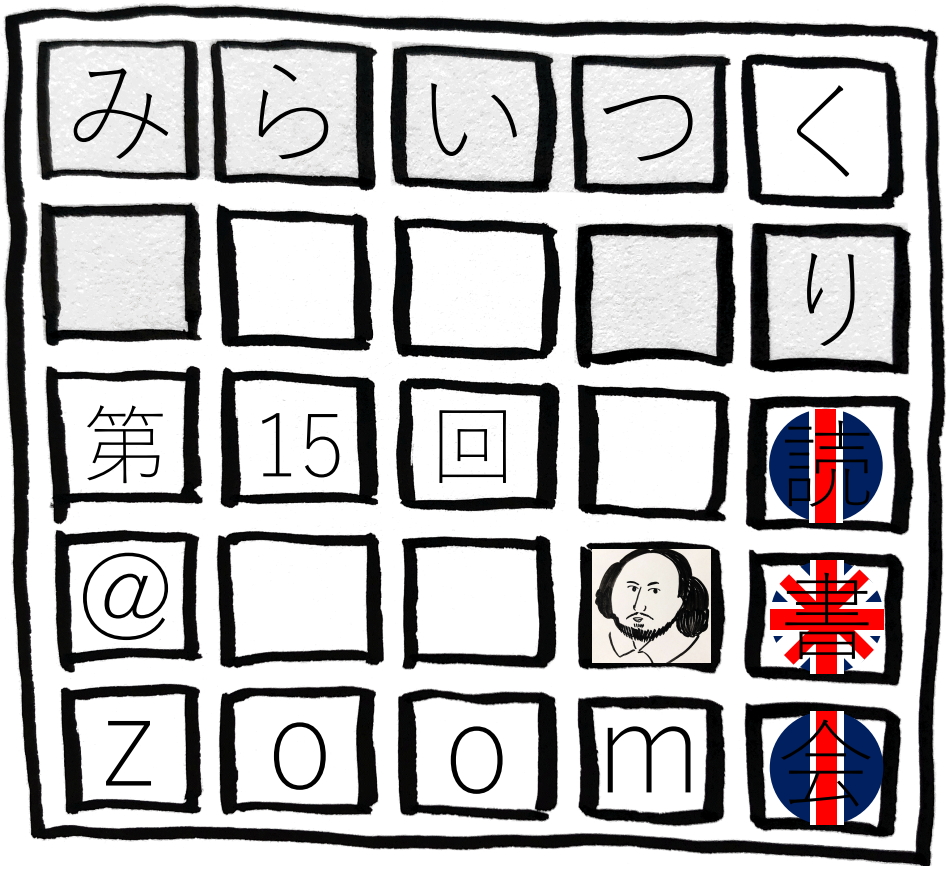
B：ギリシャ「沼」にははまらないことにするんですね。

A：足をつけたくらいでやめておきましょう。次回ってきた時に「深い沼だったな」と思い出してもう一歩踏み出すことにしましょう。次どうしましょうか。以前はイギリスか北欧かと話していました。
D：イギリスはディケンズもありますよね。後で思い出しました。
B：チャールズ・ディケンズ。『クリスマス・キャロル』ですね。
D：あれはイギリスですね。
B：どっちに行きましょうか。シェイクスピア読んだことないというのを脱するには、という感じですよね。C さんもこれみよがしに「これマクベスね～」と言えますよね。
C：言わないですよ～。
B：「それオイディプスですよね～」って。
D：知識人の匂いがしますもんね。
A：しますね。
D：シェイクスピアとかを引用するとね。
A：ではシェイクスピアに行きましょうか。
C：薄いやつでお願いします。
B：前にも言いましたが『マクベス』ですね。
C：最悪の時には映画化していてほしいと思っています。
B：『マクベス』はされているんじゃないですか？youtube には朗読があると思います。漫画で読むシリーズもあると思いますね。
D：小学校の時、『ヴェニスの商人』を学芸会でやっていた学年がありました。
B：それはエグいですね。
D：「あなたの肉を 2 キロください」という話ですね。どんな先生がやらせたんだろうと思います。
B：シェイクスピアでは「どのセリフが好きでしたか」なんかを聞き合ったらいいのかもしれませんね。『マクベス』、最初の方だけ少し読みましたが、読みやすそうでしたよ。岩波で言うと後半は解説が多いし、戯曲だからセリフがほとんどですね。そんなに時間かからないように思います。
D：「to live or not to live」と言うのはなんでしたっけ？ハムレットですね。
B：36 歳で『ハムレット』を書き、40 歳で『オセロー』、41 歳で『リア王』ですって。42 歳の『マクベス』を加えて四大悲劇と呼ばれるみたいです。
C：『ロミオとジュリエット』とかなら参加者増えるかもしれませんね。
B：でも「シェイクスピア読んだことあります」と言って「何を読んだんですか」と聞かれた時、答えるなら『ロミオとジュリエット』よりも『マクベス』の方がいいですよね。知的な雰囲気を醸し出すためにも。『ロミオとジュリエット』と言うと「あー」と言われそうですよね。
A：では『マクベス』にしましょう。
B：黒板に「沼」を書いていますね。
C：「沼」注意。
A：これ以上は行かないということで描きました。
B：僕は「沼」に足を突っ込みながらイギリスに移りますよ。
A：私も実はいくつか今までの作品を引きずっています。カフカも別の作品を読み始めていますし、『星の王子さま』も解説本を読んでいて面白いです。

B：何を読んだんですか？
A：比べて読む、批評する…。
B：NHK の「100 分 de 名著ブックス」に『星の王子さま』ありましたね。あとは『星の王子さま を読む人のために』という、「～を読む人のために」のシリーズがあるんですけど。それも買って読んでみると面白いかもしれないですね。
C：前回の『星の王子さま』は色々な人から感想をいただいていて、前回参加してくださった方は「この話はなんとなく知っていたけれど、もう一度読もうと思った」と言っていました。
B：やはり作品の訴求力が大きいと良いのかもしれません。
A：『星の王子さまの世界』という本でした。ちょっと古い中公新書なので、結構とがっているんですよね。「『星の王子さま』を読んで、まるで無邪気に感動した気になっているふりを装うだけで、自分は心が見えるというようになれる」「童心教だ」と言っています。「子どもの心は素晴らしい」とただ読むような文学ではない、というように書いてありました。面白いです。
B：なるほど。
A：日程を決めましょう。
…
B：『オイディプス王』も NHK の「100 分 de 名著」に入っていたんです。解説本もありますね。
A：こないだ、伊集院光さんがラジオでカフカについて話していたんです。
D：話していましたね。めちゃ面白かったです。カフカ『変身』を読んだ時に「これは俺のことだ」と思ったと。伊集院さんって引きこもりだったんですよね。学校に行けなくなっちゃって、それで落語家に弟子入りしたんですよね。妹が兄のためにバイオリンを弾いて、他の人からパチパチと褒められる。その時に自分が出て行ったら「出てくんなよっ」ってなる。伊集院さんは「あれもよくわかる」と言っていました。自分には兄弟がいるんだけど、自分が引きこもっている時に「今日友達来るから、絶対存在を消せよ」と言われるような経験があって、「俺のことだ」と感動したと言っていました。
A：伊集院さんは「100 分 de 名著」をやっていますからね。「誰に一番共感しますかと言われたらカフカだ」と言っていました。
D：カフカには 1 ページくらいの短編があるんですよね。それを紹介していて。そのラジオ番組の中で 1 ページの短編を全部読んだんですよ。朗読したんです。全部朗読しても 1 分か 2 分くらいですよね。それで把握できるんです。内容は本当に訳がわからない。「～というものがある。物体なんだけれど…」というように始まって、出口ではそれが生き物だとわかってくる。結局その「なんとか」は何か定義されていないまま終わります。「すごいな」「これはもはやハガキ職人が書くネタだな」と伊集院さんは言っていました。
B：伊集院さんですもんね。「100 分 de 名著」は結構マニアックなやつを読んでいて面白いんですよね。
C：私もペストの回と、エンデの回を見ました。解釈なんかもわかりやすいなと思いました。
B：こないだ本屋に行ったら、100 分 de 名著シリーズの中に「大乗仏教」というのがありました。もはや本ですら無くなっていると思っていました。それを買って、12 月に備えようと思っています。12 月に宗教学講座というのがあるんですけど、12 月 2 日に「牧師先生と話そう」、12 月 9 日には日蓮宗のお坊さんが話してくれます。

D：それはオンラインなの？
B：そうです、オンラインです。その時間帯に出られる人は少ないかもしれなくて、録画でみたいですと言っている人がいました。録画を配信して、その録画を見たいという人はいっぱいいるんだろうなと思います。
C：こないだ稲生会のスタッフと話していたら「神道はないんですか」と言われました。確かに「キリスト教」「仏教」「神道」ですよね。
D：「神道」を語れる人っているんでしょうか。
C：「神道」は神主さんでしょうか。
D：神主さんも日本書紀とかを把握しているのかといったら…。あの辺りは本当に謎ですよね。
B：だって狩野英孝さんですよね。
D：本当に教えてほしい。
A：みなさん、日程を決めましょう。
…
B：最近月曜日ですよね。11 月 2 日はどうですか？
D：16 時半なら大丈夫です。
A：では、11 月 2 日 16 時半でお願いします。
C：100 分 de 名著にあったらいいなー。
A：漫画があるやつも狙い目ですよね。
D：もうナウシカをやるとかね。
B：ナウシカ行きますか…。ナウシカは「沼」というより「腐海」ですね。宮崎駿の思想はここにあるんだなというのがわかりますよ。ハイデガーとかを絡めて読むと「なるほどな」と思いますが。ひたすらに長いですよね。『カムイ伝』とかに近いような気がします。印象としては。
A：では次回『マクベス』でお願いします。





【日時】
2020年11月2日(月)16:30～17:30

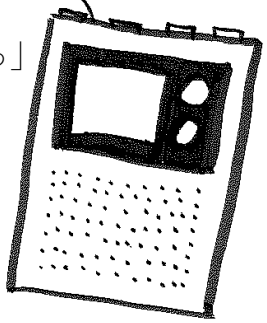
【課題図書】
シェイクスピア『マクベス』

【参加方法】
興味のある方は、以下事務局までご連絡ください。
zoomのアドレスとパスワードを添付して返信いたします。

事務局：みらいつくり研究所　松井
Eメール：matsui-ka@kjnet.onmicrosoft.com

「ラジオ参加」も大歓迎！

「ちょっと議論には加われない」「その時間は作業しているから」
そんなみなさんにおすすめの「ラジオ参加」。
zoomのカメラをオフにして、ラジオみたいに聞き流す。
そんな「学び」があっていい。そんな「参加」があっていい。
興味のある方はぜひ事務局にお問い合わせください。



みらいつくり大学校企画

みらいつくり大学校企画

第 15 回みらいつくり読書会@zoom 記録

第 16 回は、2020/11/16 の 16:00～17:00 に行います。興味のある方は下記事務局までご連絡ください。

事務局 みらいつくり研究所 松井

E メール：matsui-ka@kjnet.onmicrosoft.com

【課題図書】	【実施日時】	【参加者】
シェイクスピア『マクベス』	2020/11/2 16:30～17:30	A,B,C,D(＋ラジオ参加 5 名)

内容（※語尾を中心に編集しています）

A：あらすじの説明があったほうがいいでしょうか。

B：あったほうがいいと思います。

A：まず、マクベスは人の名前です。そしてこの物語は、スコットランドが舞台になっています。スコットランドにダンカン王がいました。そして、将軍としてマクベスはいます。バンクォーも将軍の一人です。マクベスとバンクォーが戦果をあげた、というところから物語は始まります。二人はその戦果に応じてダンカン王から褒美をもらうこととなります。

A：ダンカン王のもとへ向かう道すがら、二人は魔女に出会います。魔女の登場はシェイクスピアらしいところなのかもしれません。魔女は予言めいたことを語ります。マクベスには「あなたは王となる方」と言います。マクベスは驚きながらその言葉を聞きます。魔女はバンクォーに「王にはならないが、王を生む方である」と言います。マクベスとバンクォーは不安になりつつもそのままダンカン王のところへ到着し、褒美をもらうやりとりが行われます。

A：マクベスは自分が王になると言われたことを自分の奥さん「マクベス夫人」に相談します。その時のマクベスは気が弱いところがあるのですが、夫人からは「ちゃんとしなさい」というように尻を叩かれます。その後、マクベスとその夫人で、ダンカン王の暗殺を企てます。暗殺は成功します。その大騒動の際に、ダンカン王の息子たちは、自らの命の危険を感じて海外に逃亡します。マクベスは王になりますが、バンクォーが「王をうむ」と予言されたことを思い出し、その存在を疎ましく思うようになります。そしてマクベスはバンクォーとその息子を暗殺しようとします。バンクォーを暗殺することには成功しました。しかしその息子であるフリーアンスは生き延びて海外に逃げることとなります。そのあたりから、マクベスは暗殺をした負い目なのか、この辺は議論できればと思っていますが、だんだんとマクベスの人柄が変わってくように私は思いました。亡霊と話すようにもなってきます。マクベスはそのように変わっていきます。

A：マクベスは魔女にもう一度会って予言を聞きたいと思います。さらに先のことを聞きたいと思います。次のことを教えてくれと言います。私の読んだ訳では、幻影が伝えたとありましたが、二つのことを予言します。一つ目は、「あなたは、女から生まれたものによっては倒されない」ということ、二つ目は「森が向かってくるまでは倒されない」ということです。両方とも普通に考えるとあり得ないことなので、マクベスは自分の治世は安泰であると思って安心します。

A：その後、海外に逃亡していたダンカン王とバンクォーの息子たちが海外の軍隊を連れて攻めてくることとなります。最後の戦いに向かっていくわけです。予言を受けて、人格も変わったマクベスは、強

く誇る王となっています。マクベスの敵軍は、森に入ったときに枝を切り取って手に持ったまま進軍をして自分たちの数を計られないような戦略をとります。その様子は、まるで森が向かってくるかのようにマクベスには見えました。また、ダンカン王の息子であるマルカムは、母の胎から月足らずで出てきたことがわかります。今で言う帝王切開です。
B：それはマルカムではなく、マクダフという別の登場人物ですね。
A：マルカムはその軍勢に加わっていますか？
B：マルカムとマクダフは、一緒に攻めてきます。ダンカン王の息子と一緒に攻めてくるマクダフが、帝王切開で産まれた人だったんですね。
A：ありがとうございます。そのようにして、マクベスが聞いた予言は成りました。マクベスが信じていたようにはならなかったわけです。そのようにしてマクベスは討たれて死にます。そして劇が終わります。長くなってしまいましたがいかがでしょうか。
B：ちなみに『シェイクスピア大図鑑』によるとこのような感じです。（図を示す。）名前が、マクベス、マクダフ、マルカム、などわかりにくいですよね。
A：大まかな内容ですが振り返りました。今日はたくさんラジオ参加してくださっています。感想から話していきますね。最近はそれぞれが読んだ訳を紹介しています。皆さんは誰の訳を読みましたか？私は河合祥一郎さんの訳と、松岡和子さんの訳を読みました。
B：河合さんの訳が一番新しいのでしょうか。何年ですか？
A：平成 21 年とあります。
B：一番新しいと思いますね。松岡さんの訳は何年ですか？
A：96 年とあります。1969 年です。
B：やはり河合さんのが新しいと思います。松岡さんの訳は、ちくま文庫から全集で出ているんですよね？
A：そうですね。河合隼雄さんが『快読シェイクスピア』という本を書いていたので、解説本として読もうと思いました。
C：河合隼雄が書いているんですね。
B：書いているというか、松岡さんと対談しているんですよね。
A：これを読んで、松岡さんの訳と併せたら良いかなと思ったのですが…。途中で B さんと話をして「岩波は難しい」なんて話をしていたところでした。
B：D さんがもっているのは岩波ですよね。
D：今回買いました。シェイクスピアは色々と売っていたので安いものを買ってみました。
B：ごめん、それじゃない方がよかったですね。
D：どうりで最後まで辿りつきませんでした。しおりが…。
A：B さん、いくつか訳を比較して、岩波が読みにくかったんですよね？
B：岩波は、最初に読んだからかもしれないけれど…。
D：1993 年とありますね。
B：岩波はおそらく版によって訳している人が違うようです。坪内逍遥さんが訳したものが一番古いようですね。坪内逍遥訳は 1900 年より少し後とかだったはずです。青空文庫にもありましたか？
D：青空文庫では作業中となっていました。

B：そうですか。C さんが読んだのは、福田恒存さんの訳ですよね。新潮文庫です。
A：新潮文庫は全集になっているんですか？
B：残念ながら全集ではありません。なので最後の方に書かれている『テンペスト』などはなかったりしています。でもこの訳は読みやすかったように思います。C さん、いかがでしょうか。
C：読みやすかったです。
B：松岡さんの訳とは違うところがあるという記述がありました。
C：僕は解説が良かったと思いました。
B：後ろの方にあるやつですよね。解説だけで結構文量がありますよね。
C：そうですね。解説が全体の 1/3 くらいあるんじゃないかなと思います。
A：私が読んだ二つは、解説がいまいちだったように思っています。新潮文庫が当たりだったかもしれませんね。
A：では感想ですが、D さんも途中まで読んだ感想でも構わないのでお願いします。
D：では私から。途中で時間がなくなり、ネットに載っているネタバレあらすじを読みました。最後こうなるのね、と思いました。戯曲は、想像がしやすいなと思いました。私は、村上春樹さんが結構苦手です。風がどんなふうに吹くのか、景色がどうかとか、そういうのを詳しく言われるのがあまり得意ではありません。そんなことを思っています。感情や表情や、登場人物のセリフがわかりやすく書いてある方がすんなり入ってきます。『マクベス』を読んでいて、豊臣秀吉みたいだなと思いました。最初は部下に気に入られていて親しまれているのに、女の人に少し振り回される。ちょっと似ているかなと思いました。最初、魔女が予言したときに、自分の思いが成るために人を殺さなくてはいけないのであれば…女性だったらそこまでするだろうか、とも思いました。女性とも限らないかもしれないですね。私だったら「そこまでして…」と思います。「望むものが手に入るよ」と言われても、そのために人を殺したり人を傷つけたり、家族を犠牲にしたりしなくてはいけないのなら、それは別にいいかなと思います。もしくは、その望みは今じゃないんだな、と思います。例えば、「5 年 10 年経ってかなうことなんだな」「今すぐではないんだな」と考えると思います。そんな発想をすると思います。予言を信じている・信じていないの問題ではありません。予言を信じたとしても、今の話じゃないんだな、と考えると思います。今私は精神的に強いわけではないけれど、弱い時の自分だったらそうなってしまうこともあるかなと考えました。最後まで読んでいないから、あらすじから空想で話しているような感じなんですけど。2015 年に映画化されているようなので、観てみたいと思いました。
A：先ほどあらすじを説明したときに話しましたが、マクベスの変化は面白いなと思いました。最初は小心者というか自信のないところも見えます。そこから、狂気じみていく、暗殺することがマクベスの人格を変えていくような描かれ方をしていると思いました。また、マクベスを二つの訳で読んでみて、河合さんの訳では、よりたくさんの言葉遊びが使われていました。日本語にする際にも、意図的な言葉遊びを使って訳されていました。シェイクスピアの楽しみ方に、言葉遊びがあるようにも思いました。マクベスでいうと魔女のやりとりにある有名な一節、「汚いはきれい」でしたっけ。そんな言葉遊びも面白さの一つだと思いました。そんなものが散りばめられているので、劇を見ている人たちはプププと笑う、そんなようにして当時から観られてきたのかなと思いました。前回、『オイディプス』を読んだ際、C さんが「英雄劇」と「運命劇」の話をしてくれました。英雄がいて、誰かヒーローがいて、その人が運命を変えていくような「英雄劇」の物語は私たちの身近にたくさんあります。逆に、

「運命劇」と言われる登場人物が運命に翻弄されていくような劇を、今の時代は求めているのではないか、というようなことを、平野啓一郎さんを引用しつつ話してくれました。その二つの区分によると、『マクベス』は「運命劇」かなと思いました。そういう意味で、『オイディプス王』との繋がりも大まかなものですが感じました。「運命劇」のつながりで言うと、魔女の存在が『オイディプス王』との違いだと思いました。魔女は運命を知っているんですよね。でも操っているわけではありません。運命を知っていて、未来を予見している。好奇心、遊びのようにして、人々が惑わされるのを楽しんでいる。そんな存在として魔女は描かれていました。当時の人たちはどのようにして魔女の存在を捉えていたのか、気になりました。何か悪いことがあったときに「これは魔女のせいだね」と話していたのか、それとも運命があるとしてその運命を先に知っている不審な人たちがいるということなのか。フィクションとして見ていたのか、そうではなかったのか。「最近、知り合いのおばあちゃんが変死をしたんだけれど、魔女が関係しているかも…」なんて考えていたのか。そんなことが気になりました。他の作品では『ハムレット』を読んでみました。同じように魔女が登場しているので、シェイクスピア作品に共通するものなのかなと思いました。以上です。

C：僕は、本文だけを読んでいても、ほとんど何もわからなかったです。夢の中の話というか。劇だから。劇の台詞だけを読んでいるからですよね。これって、漫画のセリフだけ吹き出しだけを読まされているようなところがあると思うんです。絵があって完成するはずのものを、文字情報だけを抽出したものを読んでいるわけです。だからわからない前提で読みました。戯曲なるものを観たことがあれば、まだ補完しやすいと思います。「これって歌っているんだな」とか。これって歌うかのようにして話すんですよね？「お前は～♪」というように語るんですよね。そういうことだから韻を踏んだりするんですよね。そのような文法をわかっていれば違うのかなと思って読みました。僕は解説を読んだことで「そういうことね」と思えました。福田恒存さんの解説がすごく良かったです。「魔女」というのが、実際に魔女がいるのかマクベスの内側の妄想なのかがわからない、と書いてありました。「魔女」というのが、彼の内側にいるのか外側にいるのかわからないということです。福田さんはそう書いていました。マクベスは、運命に動かされているのか、自由意志で生きているのか、どちらの解釈も成り立つようになっている。この両義性、反語法、福田さんはアイロニー（反語法）と読んでいました。運命なのか自由意志なのか、魔女というのは現実の存在なのか自分の内側の存在なのか、という両方の解釈が成り立つというアイロニーこそが『マクベス』という作品の根幹にあるものなんだ、と言っています。「きれいは汚い、汚いはきれい」という一番有名なセリフは、まさにそれらを象徴する台詞であるということでした。そして、マクベスが登場して、一口目に言うことが「こんなにめでたい嫌な日はない」なんです。これもアイロニーなんです。だから、相反する形容詞を二つ使うということで、人間は運命で生きているのか自由意志で生きているのか、どっちでもないしどっちでもある、というようなそういう話なんだ、と福田さんが言っていました。その解説を読んで「そういう読み方なんだ」と勉強になりました。そんなところです。

A：魔女の存在って何なんだろう、と思っていたのですっきりしました。

B：僕も最初は D さんと同じ岩波文庫で読みました。全然わからなくて。自分にとってのシェイクスピア初体験だったから「自分には教養がないのか…」と思いました。「シェイクスピアを読んで面白くない人がいるのか！」と言われるんだろうな、と思いました。だけど、それで終わるのはよくないなと思って、かたっぱしから買っていきました。解説本や他の訳のものです。もう一度読み直したのが、C

さんと同じ新潮文庫のものでした。これを読んで「もしかしたら面白いのか？」思いました。僕が読んで一番面白かったのは、先ほど A さんが言っていた河合隼雄さんと松岡さんとの対談本も読んだんだけれど、別に『深読みシェイクスピア』という本があります。松岡さんが訳をしていますが、かつ、この方は蜷川幸雄さんの舞台の翻訳をしていたので、本の中に松たか子さんとか大竹しのぶさんとかが出てくるんです。マクベス夫人を演じていたのは大竹しのぶさんなんですって。

D：似合いますね。

B：松岡さんは、大竹さんとやりとりをしながら、舞台の始まる直前に、ある箇所を見つけたらしいんです。「私たち」「we」が入っている部分を見逃していた、というんです。それまでの訳を読んでも、日本語には「私たち」とは訳されていない、と。そこに「we」が入っているのに気がついて、大竹しのぶさんに相談したらしいんです。大竹しのぶさんは「それは入れないとおかしいから、入れて」と言ったので、直前に台本を書き換えたらしいです。何を言いたいかというと、松岡さんが「we」を発見した部分は、マクベスとマクベス夫人についてです。途中まで、マクベスとマクベス夫人は「we」で表されています。二人でやりとりする場面でも、ずっと「私たちは～」と言っているんです。途中からそれがなくなってくるんです。その場面は、マクベスが、バンクォーを殺すあたりです。バンクォーを暗殺するにあたって、マクベスは奥さんに相談していないんですよね。だから、マクベス自身が考えてマクベス自身が実行したことなんです。でもそのあたりから、二人が離れていく。それまで一体であると書かれていたものが、だんだん離れていくんです。そして奥さんが狂い始める。マクベスはマクベスで奥さんと全然違う考えになっていくわけです。最終的にマクベスも死にます。先ほど、C さんが魔女はマクベス自身かもしれないと話していましたが、「もしかするとマクベス夫人はいなかった説」もあるようです。

C：あー、ありえますよね。

B：マクベス夫人は、マクベスのもう一つの人格という意味です。

C：「ファイト・クラブ方式」ですよね。

B：シェイクスピアの作品の中で、登場人物に名前がないのはマクベス夫人だけらしいです。

A：あ～。

D：あ～。

B：みんな夫人であったとしても名前があるんです。でもマクベス夫人だけは「マクベス夫人」なんです。魔女も本人が作り出したものかもしれないけれど「それによってどうする？」という自分自身の心の声のような、良心のような話ですよね。マクベス夫人がナイフで刺して血だらけの手を見せて、マクベスがそのナイフを戻す。そのあたりまで含んで考えているんだとしたら、これはめちゃ面白いですよね。誰か他の人が解説本で書いていたのですが、そもそも、マクベスが一番受け入れられなかった人が、目の上のタンコブのようにしてどうにかしたかった人が、最初からバンクォーなんだというものもありました。ダンカン王ではないと。だからこそ、殺して亡霊として出てくるのはバンクォーです。ダンカン王が出てきてもおかしくないはずですよね。

D：確かに。

B：二人とも優れた将軍ですが、バンクォーは公明正大な正しい人です。マクベスはバンクォーを一番にライバル視していた。魔女からはじめに予言を受けたときにも、マクベスが予言を聞いた後に、バンクォーが「俺には」と聞きます。同じ功を成している二人なのに、マクベスにだけ話してバンクォー

に何もないのはおかしいですよね。でもバンクォーに与えられた予言は未来のことでした。「未来永劫あなたのところから王族が続いていく」という予言ですから。マクベスがもともと受け入れられなかったバンクォーに対して「やはり俺ではないんだ」というようなことから、バンクォー殺しが起こっていった、というような解説をしている人がいました。なるほど、と思いました。
A：私は解説本には手を出せなかったので、色々な読み方があるんだなと思いました。魔女も夫人も、マクベス自身なんだというような、まさに「ファイト・クラブ状態」なんだとしたら、これって「運命劇」なんでしょうか。
B：あと、眠りを奪われていますよね。王を殺したときに「眠りを奪われた」と言っています。
C：そうですか。
B：そうなると、どこから眠っていて眠っていないか、夢かそうじゃないかわからなくなってきますよね。
C：まさに『ファイト・クラブ』では眠りを奪われていますからね。
B：『ファイト・クラブ』をみていないから「ファイト・クラブ状態」がわからないです。
C：絶対見た方がいいですよ。あれは絶対。
D：あれはブラッド・ピットですよね。
A：あの時のブラッド・ピットめちゃかっこいいですよね。
C：めちゃかっこいいし、その後 10 年 20 年つくられた映画の元ネタになっていますよね。色々な映画を見て、この手法は『ファイト・クラブ』だな、と思いますよね。
B：「この手法は～だね」と思うものは、大体ギリシャ神話かギリシャ悲劇、シェイクスピアから来ているのかもしれないですね。
D：映画同好会…。
B：最後のオチのくだりは何だったんでしょう。森がやってくる感じ。帝王切開が、という感じ。舞台で演じると面白いのでしょうか。
C：あとがきとかにも書いてありますが、「やはり舞台を観ろ」ということでしょうね。あとは「現代的な不安」と書いてありました。あとがきのあとがきに書いてありました。福田さんの解説の解説に書いてありました。福田さんって昔の人なんですよね。だから解説も昭和 36 年なんです。
B：必ず「戦後に活躍した福田恒存」と出てきますよね。
C：その福田さんの昭和 36 年の解説を、中村さんが昭和 46 年に解説しているんですよね。あんまりアップデートされていないんですけど。今からすると。
A：最初の解説から「現代の不安」と言っているんですか？
C：中村さんが、福田さんの解説の解説をして、『マクベス』は現代的な不安を予言したような作品なんだ、というようなことを言っています。
C：だから、やはり『ファイト・クラブ』なんですよね。『ファイト・クラブ』に出てくる人物って、現代の生活様式、資本主義というものに完全に阻害された人物なんです。もはやネタバレも何もないのですが。その阻害された人の破壊衝動が、別人格として現れるんです。その二つの生を生きるんだけれど、彼自身は気がついていない。初見の人はやられますよね。まさか！と思いますから。でも知っていても面白い。『ファイト・クラブ』もそうですが、社会というものに対する不安が分裂をさせるんですよね。この解説で「現代的な不安」と言われているのは、マクベスには「血塗られた王位」があり

ます。マクベスは簒奪者なんだけれど、簒奪者というのは必ず簒奪されるという不安と常に戦うわけです。その不安に耐えられなくなって、自壊したというんです。それは現代的な現象である、ということでいうと、この話は「アメリカ論」でもあると思うんです。アメリカって、大統領選挙が今週ありますが、アメリカはずっと悪夢と闘っている国です。強迫神経症的に恐れていることがあります。それは、自分たちアングロサクソンがいつかこの王位を奪われるかもしれないという強迫観念と戦っているんです。ある時はそれが黒人であるとなるし、ある時は日本バッシングになる。今だったらヒスパニックとか中国人とかになる。壁を作るのもそうですよね。なぜそんなにこわがるのかというと、それは自分たちがネイティブ・アメリカンを血で追い出したからなんですよね。だから、自分たちの王位が血に塗られていることを彼らは潜在的にわかっているんです。だからいつか自分たちも血で追い出されるかもしれないという悪夢と戦っているんだ、ということです。これはメジャーな説明だから、僕だけが言っているわけではありません。それってマクベスっぽいなと思います。

A：今話していた「不安」とか、内面・外面が溶け出しているということですが、マクベスが狂っていくのも、夫人はいなくて、マクベスの内面にある夫人的な人格が狂っていくのだとしたら、そのように読んでいくことができますよね。シェイクスピアはそのようなことを考えていたのでしょうか。それとも『星の王子さま』の時のように、作者の意図を超えてそのような物語になっているのか。かなり古い作品であることは間違いないので、当然いろいろな解釈があるのはもちろんですが。でもさすがに、ここまでなっていると、単に王族の話を書いただけではないような気がしてきますよね。シェイクスピアにも多少なりともそんな意図があったような気がします。

B：舞台の脚本だから、「あそび」があるというか。舞台は、作者が考えたことにプラスして演じた人たちの演じ方によりますよね。映画も取り直しがなくはないけれど、舞台は、やり直し・演出のし直しがとても多いです。そして色々なところで繰り返し演じられます。二週間舞台があるとしたら、一度として同じ舞台はないわけです。多分、シェイクスピアは「自分はこういうことを言いたかったんだ」ということではなくて、「『あそび』の部分は演じる人に任せるよ」というスタンスだったのではないかと思います。だからこれほどまでに長く残っているのではないかと思います。そんなことについても誰かが解説本で書いていました。イギリスの方が日本で上演された『マクベス』を観て、演出を観て、びっくりしたと書いてありました。確か『マクベス』だったと思います。夫人もいる時にマクベスが「もうみんな下がってよい」という場面で、ト書きには「一同舞台から去る」と書いてある。その時に、夫人が「えっ」という顔をするんだって。普通だったらみんな下がるだけなんだけれど、部下と一緒に夫人もいなくなるだけなんだけれど、夫人だけは一度「えっ」という顔をして去る。夫人はそれまでマクベスと一心同体だと思っていたのに、自分はそうではないとマクベスから見られた瞬間だったという演出らしいです。それを見て驚いたらしいんです。もしかしたらシェイクスピア自身もその演出を見て驚くかもしれないですよね。「ああ、そう読むんですか」というように。小説と違って、何を言いたいのかということを考える必要はないのかもしれません。

A：再解釈されやすいのかもしれないですね。

B：戯曲はそのような特徴をもっているということですよね。D さんが言っていた村上春樹の「～の風が吹いて…」というような説明は、舞台にはないということですよね。だから舞台装置も演出もいくらでもやりようがありますよね。書いてはいないから。

C：能とか歌舞伎など、僕は詳しくはないんだけれど、ちょっとそういう部分があるのかもしれません。

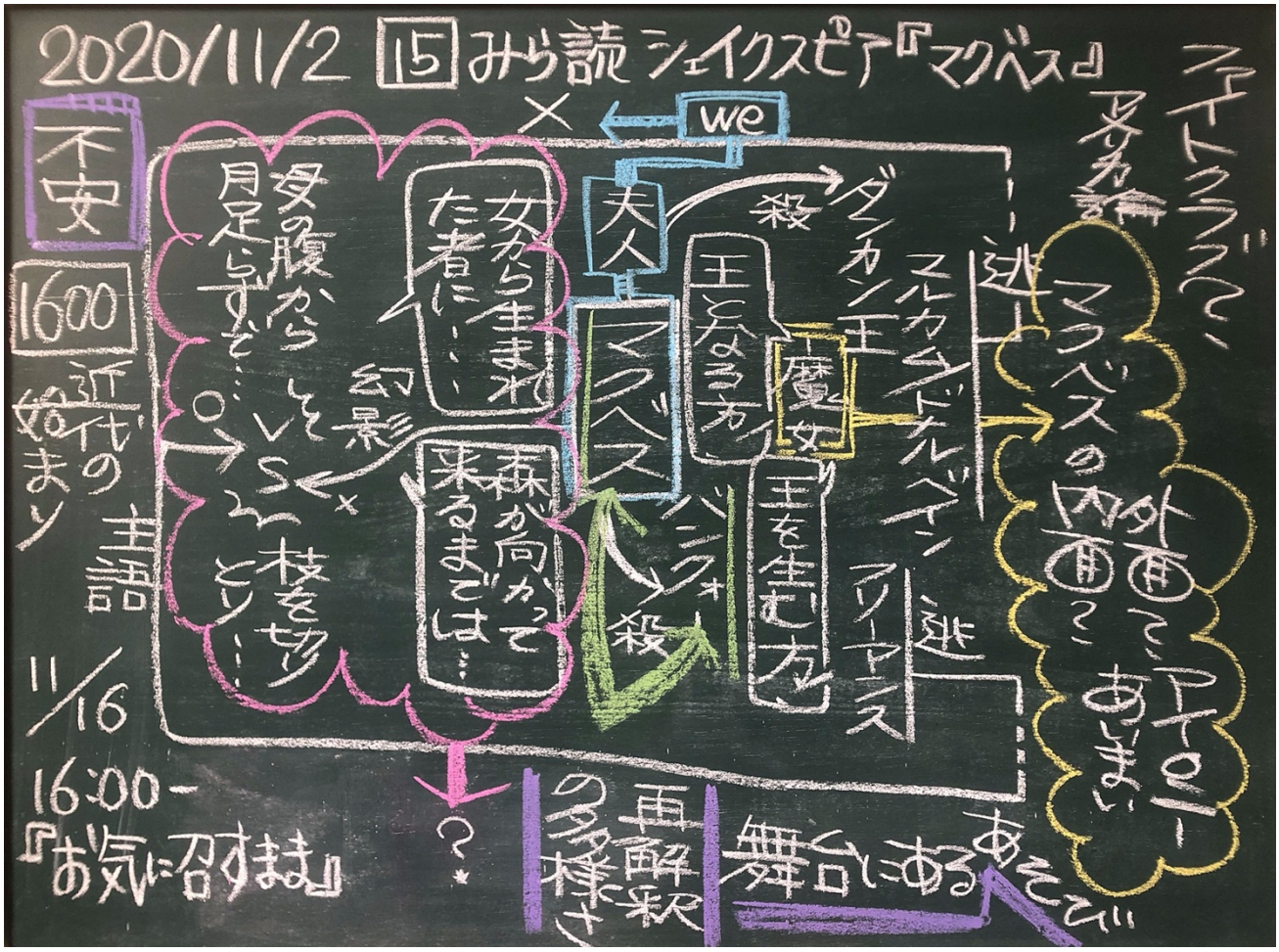
能って、死んだ人が憑く、狐に憑くとか、そういうことがありますよね。僕の通っている教会に、能の関係の人がいるんです。
B：すごいですね。
C：彼は、能を通して、能を一生懸命やることが神様への奉仕であると言っています。能の世界は「憑依」とかそんな話ですから、人によっては「キリスト教的じゃないのでは」という見方もあるんだけれど、でもそこにクリスチャンがいなくなることはよくないから、ということで、家柄ということもあってやり続けています。彼に聞いたら、そんな話が多いんだけれど、それって人間の…いわゆるメタファーなわけじゃないですか。狐が憑くというのも、人間は死者というものをおそれるからかもしれません。「マクベスはおそれるが故に幽霊が見えた」というのはそういうことですよね。そういう話は、日本だと能とかいう形で語り継がれますが、劇として語り継がれるというのは、まさに河合隼雄的というかユング的というか、人間の深層にある心理を夢として語るというか、そういう要素があるんだと思います。
B：シェイクスピアの本を何冊か読んだんですけど、今 C さんが言っていた別の人格になるということが多いように思います。何かに取り憑かれるというよりは、意図的に他の人格を演じることが多いです。最初の登場人物が書かれているところにも、カッコをつけて「～こと…」とあります。途中で名前が変わっていたり、別な人格になったり、別な人のふりをする登場人物がいるんです。それを頭に入れて読まないと「何でこの人がこれを言っているの…？」となってしまいます。この人が～さんのふりをしているんだ、というようなことです。その辺りから言うと、取り憑かれていると言うよりは、別人格を演じる、人間のペルソナというか色々な顔をもっているということを伝えたかったのかもしれません。喜劇に多いような気がします。
A：私が読んだ『ハムレット』にも、「演じる」というか、わざと狂ったふりをするシーンがあります。そこに意図的な言葉遊びが出てきます。確かにそうかなと思いました。
C：そして、これらが書かれているのは 1600 年代ですよね。
B：1600 年代前半ですね。
C：その時期って、デカルトが『方法序説』を書いた時期と重なってきます。まさにそれは近代の始まりです。國分功一郎が『中動態の世界』で言っているのが、そのころ言葉に主語が入り始めたということです。それまでのヨーロッパの言葉、特にラテン語には主語がないんです。「コギト エルゴ スム」は「我は考える、ゆえに我あり」ですよね。「コギト」という一つの言葉で主語と動詞が入っているんですよね。ラテン語は主語がいらないんです。英語とかが、主語が絶対にいる言葉として固まっていくのはあの頃だと書いていました。まさに人間の主体性というものが確立していく。順番としては社会がそれを要請したんだと國分さんは論じます。社会の法制度は、誰かが誰かを殺したら罰を与えなくてはいけない。その時に主語がわからないとよくないでしょう、と。そういうことで、言葉がそれらに合わせていったというんです。それが近代の始まりと関係があるんだという本です。つまり、『マクベス』はその転換期に書かれているから、それらが僕の頭にはありました。魔女が外部なのか内部なのかといったことは、まさに主体性があるかないかの問いです。そういうことで当時の人は悩んでいたのかなと思いました。
D：この作品はシェイクスピアの悲劇と言っていましたよね。でもこの話は、悲劇というほど悲しい話じゃないように思います。自分の権力が欲しいために人を殺していった、そして自分自身も怯えてい

く、という話なら。でも、それが内面から出てくるのであればそれは悲劇だなと思いました。自分ではどうにもできないものが自分の中から湧き出て、それに対して怯えながら人生が終わっていく。それは悲劇だと思いました。
C：人間って自分で全ての責任を負うことに耐えられない生き物ですよね。だから『ファイト・クラブ』なら、別人格を生み出すんですよね。ブラッド・ピットがやったことにし続けるわけですよね。マクベスなら、奥さんという幻想を生み出していたかもしれないです。自分が自分の運命の支配者であるということは中世にはあり得なかったんですよね。聖なる天蓋があって「カトリックの司祭が言うことが絶対で、神が支配をしている、以上」なんです。議論は終わりです。でもそれに対して人間が運命の支配者かもしれない、となった時に人間ってその不安に耐えきれなくてどこかで分裂してしまう。そういうことかもしれないですね。
B：次、どうしますか。
A：「近代の始まり」として、シェイクスピアを読んでいくのは面白いなと思います。
B：シェイクスピアの中にも、いつ書かれたのかもそうだし、悲劇と喜劇はわかりやすいけれど歴史劇というのもありますよね。四大悲劇と呼ばれるものの一つは読んだけれど、その次にいくのか、喜劇を読むのか。
A：シェイクスピアでもう 1 作品あってもいいかなと思います。特に悲劇ではないものを読むと比較がしやすいかもしれません。喜劇において、近代の始まり感がどのように描かれているのか知りたいですね。
B：確かに「悲劇」は続いていますからね。ギリシャから。
A：私は、ギリシャ悲劇をこの前に読んでいたことって、今回の作品と面白いつながりがあるなと思います。
B：ギリシャ悲劇からのシェイクスピアの悲劇だからよかったんだと思います。
A：読むとしたら、喜劇で言うとどれでしょうか。
D：なんだか明るい話がいいな…。誰かを殺すとかいうことではなくて。
C：大体殺しますけどね。
B：一番薄いのは『お気に召すまま』ですね。これは迫害される、家を追い出されるとかはあるけれど、殺すとかはないですね。『じゃじゃ馬ならし』というのもあります。
D：あー聞いたことがあります。
B：言葉は大体知っていますよね。『じゃじゃ馬ならし』は現代的な倫理観からすると違和感があることがたくさん出てくるようです。ここで扱うにはそれじゃないほうがいいかなと思います。何より『お気に召すまま』一番薄いと思います。
D：『マクベス』と同じくらいの薄さですか？
B：『マクベス』より薄いんじゃないでしょうか。
D：それは！
B：『マクベス』とほぼ同じですね。新潮文庫だと 430 円ですね。
D：お値段も優しい。
B：シェイクスピアの幸福な喜劇は、『お気に召すまま』と『十二夜』らしいですよ。でも『十二夜』は新潮文庫にはないので、松岡さんの訳を読むことになりますね。

C：シェイクスピアから離れてもいいなら、僕はイギリスのディケンズがいいと思います。シーズン的にも『クリスマス・キャロル』ですよね。
B：あ～。『クリスマス・キャロル』はちなみに明るい話ですか？ちゃんと読んだことありません。
C：明るいですよ。明るいというか…。
D：最後、幸せになりますよね。
C：普通にいい話って感じですよね。
D：幸せになる感じ。
B：ディケンズに行きますか。
C：僕はディズニーの『クリスマス・キャロル』は見ているんですが、ディケンズの小説、文字では読んだことがありません。興味があります。
B：多分、クリスマスシーズンにかかっているからそういうことを言う人もいるかなと思って、買ってはみたんですけど。
C：ちゃぶ台返しをして良いなら。
A：何せ私たちのことをアフリカで『やし酒飲み』がまっていますからね。イギリスに長居するわけにはいかないですよね。
C：リスナーが減る方に減る方に行っていますけどね。
B：先日、『やし酒飲み』が控えているからと思ったら、家で見つからなくなってしまって。そういうことはよくあるんですけど、もう一冊買ったんですよね。『やし酒飲み』の内容と重なって、「本当は買っていないんじゃないか」と思ってきましたからね。
C：「もう夫人が買っているんじゃないか」ってね。
B：B 夫人が買ったんじゃないかってね。
A：we が買ったんじゃないかってね。
B：次って 12 月ですか？
D：もう一回くらい 11 月中にありますよね。
B：11 月もう一回シェイクスピアの悲劇にして、その次のクリスマス前にディケンズをぶつけるのはどうでしょうかね。
A：今後の予定にも関わると思うんですけど、『100 年の孤独』をお正月くらいに読めたらいいかな、なんて考えていました。
B：新書・文庫にはなっていませんよね。
A：おそらくハードカバーです。読むのも大変です。
C：僕は一度図書館で借りて、挫折して返したことがあります。
D：え～C さんが挫折したものを私に読ませないで。
C：その時忙しかっただけだと思うんですが。でも 300 頁はありますよね。
A：南米に行くなら、避けて通れないかなと思うんですよね。
B：南米のもう少し読みやすいやつを探したんですが…。
C：そういうのは、何回かに分けるのもいいですよね。
B：『100 年の孤独』を読むなら付き合いますよ。年末年始で。そういうきっかけでもないと読まないですよね。

D：私は入院しないと読まないかもしれません。本当にすることがない時じゃないと。
A：『100 年の孤独』こそネタバレありそうですけどね。
D：さすがにありそうですね。
A：まあ、あんまり先のことを考えすぎてもと思いますが、いかがでしょうか。とりあえずシェイクスピアにいくか、ディケンズにいくか、というところでしょうか。
C：次はまだ 12 月に入っていないんですね。じゃあ 12 月のその時に『クリスマス・キャロル』がいいかもしれないですね。
B：次の次でも入っていないかもしれないですね。曜日によるでしょうか。喜劇にいって、『クリスマス・キャロル』ですかね。
A：そのペースだとちょうどクリスマスに『やし酒飲み』を読むことになっちゃいますかね。大丈夫かな。
D：もう一つクリスマスの話を挟めばいいですよね。
C：まだ次がありますからね。
B：イギリスから一気にアフリカに行かなくてもいいですよね。
D：もうちょっと楽しみましょう、ヨーロッパを。
B：イタリアとかスペインとかすっ飛ばしていますからね。ヨーロッパで言うと、アンデルセンの『絵のない絵本』というのがあります。こないだたまたま買ったんですけど、薄くて 290 円で買えるんですよね。新潮文庫で。割と詩的です。月が主人公なんですよね。これは良さげでしたよ。だから『やし酒飲み』の前に。年始から『やし酒飲み』に行くとしてね。
D：「アンデルセンだったら参加したいです」とラジオ参加の方がチャットに書き込んでくれています。
B：おお～。ということは『やし酒飲み』には参加しなさそうですけどね。
A：次は取りあえずシェイクスピアかディケンズということですが、C さんはもうシェイクスピアはお腹いっぱいですか？
C：いいと思います。シーズン的なことを考えたので、『クリスマス・キャロル』は 12 月がいいと思います。もう一度シェイクスピアいいと思います。
A：では次はシェイクスピアの『お気に召すまま』にしましょう。
B：では『お気に召すまま』の後に『絵のない絵本』、そしてもう一度イギリスに戻って『クリスマス・キャロル』だといいですね。クリスマスシーズンに合わせて。
A：そうするとクリスマスにディケンズを読めますね。そんな見通しを持ちつついきましょう。日程はどうでしょうか。月曜日が最近定番になっていますが。
B：私は 12 月月曜日が難しそうです。11 月は大丈夫です。16 日でも。
D：私も大丈夫です。
B：では 16 日の 16 時にしましょうか。
B：『お気に召すまま』は誰の訳が読みやすいんでしょうかね。新訳にもありますか？
A：確か…無さそうですね。
B：全集にはあるはずだから、松岡さん訳はありますよね。
A：それはあると思います。
B：新潮文庫が色々な本屋さんにあるかもしれませんね。手稲山口にもあると思います。

D：そんな地区を限定して…。
C：山口…。
B：そんな地名があります。手稲は山口県からの地名が多いんですよね。
A：では、シェイクスピア『お気に召すまま』11 月 16 日 16 時からお願いします。ラジオ参加の方もありがとうございました。



みらいつくり

第16回 読書会 @zoom

【日時】
2020年11月16日(月)16:00～17:00

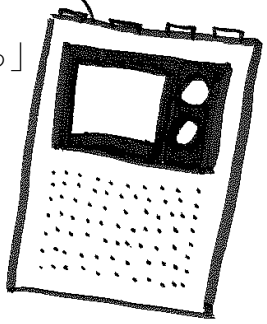
【課題図書】
シェイクスピア『お気に召すまま』

【参加方法】
興味のある方は、以下事務局までご連絡ください。
zoomのアドレスとパスワードを添付して返信いたします。

事務局：みらいつくり研究所　松井
Eメール：matsui-ka@kjnet.onmicrosoft.com

「ラジオ参加」も大歓迎！

「ちょっと議論には加われない」「その時間は作業しているから」
そんなみなさんにおすすめの「ラジオ参加」。
zoomのカメラをオフにして、ラジオみたいに聞き流す。
そんな「学び」があっていい。そんな「参加」があっていい。
興味のある方はぜひ事務局にお問い合わせください。



みらいつくり大学校企画

みらいつくり大学校企画

第 16 回みらいつくり読書会@zoom 記録

第 17 回は、2020/12/1 の 16:30～17:30 に行います。興味のある方は下記事務局までご連絡ください。

事務局 みらいつくり研究所 松井

E メール：matsui-ka@kjnet.onmicrosoft.com

【課題図書】	【実施日時】	【参加者】
シェイクスピア『お気に召すまま』	2020/11/16 16:00～17:00	A,B,C,D(＋ラジオ参加 3 名)

内容（※語尾を中心に編集しています）

A：今日はシェイクスピアの『お気に召すまま』ですね。
B：今日は C さん読めましたか？
C：今日はとっておきのものを見つけたんですよ。見ますか？じゃん。『シェイクスピア物語』です。
D：おお～。
B：何それ。
C：すごいでしょ。これに、なんと『マクベス』も『ロミオとジュリエット』も『ハムレット』も『オセロー』も入っているんですよ。
B：どういうこと？短くしているということ？
C：そうです。戯曲のあらすじをダイジェスト版にしたやつで。イギリスのラムさんという人が書いた本です。随筆家のラムさんという人が有名らしくて。それで、喜劇をお姉さんが、悲劇を弟さんが担当しているらしいです。
B：悲劇と喜劇で書き分けているんですね。
C：そうなんです。兄弟で書き分けていて、これを一冊読んだらシェイクスピアがなんとなくわかるんです。
D：すごいなー。
B：それって岩波少年文庫でしょうか。
C：そうです。岩波少年文庫。これで読めました。
D：それってセリフじゃないということですか？
C：セリフじゃないです。大きなセリフは出てきます。マクベスの時にある「きれいは汚い、汚いはきれい」というのはセリフが載っていました。それ以外は要約されてわかりやすくなっています。
B：『お気に召すまま』で何ページくらいになっていますか？
C：『お気に召すまま』で、20 ページくらいですね。
B：その中には、歴史ものは入っていないということですね？『リチャード三世』とか『ヘンリー六世』とか。
C：入っていないですね。
B：前半が喜劇で、後半が悲劇ですね。歴史ものは入っていないんですね。でもいいですね、その本。
C：そうなんですよ。

B：読書会にダイジェスト版でのぞむって。どうなんだって話ではありますが。
D：良いと思います。セリフしかないからわからないけれど、情報量としては補ってくれるような気がします。今回、僕には訳がわかりませんでした。本当にずっと「早く解説が読みたい」と思っていました。「はよ終われ、はよ終われ」と思って読みましたから。何も把握できないので。解説を読んで、ああそういうことか、という感じです。だって変装をしたりしているんです。僕は「同じ名前の男女の双子だった…」という話なのかなとか想像しながら読みました。もどかしかったです。
A：私も今回が一番難しかったなと思いました。話の流れがいまいちつかめなかったです。特に理由もなく、オーランドやロザリンドは追い出されますよね。オーランドはまだ「相撲で勝ってしまった」という理由があるかもしれないけれど、理由がはっきりしないですよね。ロザリンドが追い出される理由として出てくるのは「あなたのお父さんが前の公爵だから」といったものだけです。理由や根拠がはっきりしないまま物語が進んでいく感じが得意ではありませんでした。
D：途中、森で出てくる人たちとかも訳がわかりませんでした。オードリーがどうのとか。
B：『シェイクスピア大図鑑』によると、図解があります。
A：難しかったです。あらすじは今回説明しなくて良いでしょうか。
B：そうですね。要するに、宮廷の場面があって、宮廷から追い出されていろいろな人が入っていく森の場面があって、それに恋物語が３つか４つか５つくらい絡むんですよね。最後に４組が結婚をしてめでたし。その中心がオーランドという主人公と、ロザリンドというもう一人の主人公がいる。そして先ほどあったような、ロザリンドが「ギャニミード」を名乗って男のふりをするんですよね。この話で一番面白いのは、男のふりをしたロザリンドであるところのギャニミードが、オーランドに恋をしているはずなんですよね。そんな男のふりをしている人が、女のふりをして恋の手ほどきをする、というのが面白いくだりなんですよね。尚且つ、シェイクスピアの時代に、舞台に女の人があがるということはなかったので、これを少年が演じているんです。少年が女の人を演じているんだけど、この役の人が男の人を演じて、女の人を演じる、といったように訳がわからなくなる。その話が中心にありますよね。というだけの話だと思いました。
A：私は、その設定ありきで書いているんだろうな、と思ってしまいました。
B：そんな批判が多かったみたいです。
A：そうなんだ。
B：「『お気に召すまま』というタイトルが、ぐちゃぐちゃな設定だけれど、どうとらえるかはお客さん次第でしょう、というようにつけられている」という人もいます。一時期、文学作品としての評価がとても低かったらしいです。でもその後でものすごくレベルの高い話なんだとなったようです。
D：なるほどね。
B：ただ、それでも設定はかなり強引ですよね。
A：みなさん福田恒存さんの訳を読みましたか？
B：僕は福田恒存さんの訳です。
D：僕もです。表紙が少し古いみたいですけど。中は同じだと思います。新潮文庫ですね。
B：この人の訳が一番雰囲気は出ると思うんですよね。
A：僕にとっては、初めての喜劇だからなのか、初めての『お気に召すまま』だからだからなのか、それとも初めて福田恒存さんの訳だからかわかりませんが、一番読みにくかったですね。

B：僕はシェイクスピアを読んだのは 5 作品目くらいです。ようやく楽しみ方がわかってきた感じです。ということで『お気に召すまま』が一番面白かったかもしれないですね。
A：そうでしたか。
B：登場人物が多いですよね。それこそ、男なのか女なのか途中でわからなくなってしまうから。そういうのもあったけれど、セリフの感じとか、恋の手ほどきをしているプロセスとか、そのやりとりとか、すごいなと思いました。今もある「入れ替えモノ」ですよね。「中が入れかわっちゃった、実は…」というやつですよね。
A：道化のタッチストーンってなんだったんでしょうか。最後までわかりませんでした。セリフも独特だし、「こいつなんだろう」と思っていたまま物語が終わってしまいました。
B：わからないですね。
A：この人のセリフは聞き流すというか、読み飛ばすというか、そんなふうに読んでしまいました。
B：もう人格があるのかないのかわからないですよね。
A：キャラクターがフワフワしていて、言葉遊びをしているんだか揚げ足取りをしているんだかわからない。でも、周りの人たちは「いいこと言うね」みたいに扱います。
B：最後結婚しますしね。
C：この本(『シャイクスピア物語』)では結婚するのが二組なんですよね…。
B：え～。4 組ですよ。そこまで要約しているんですか。
C：そう、要約して、いらない人たちも省いているんだと思います。
B：それもダイジェストなんですね、すごい。
C：さっきの図も「ああこんな感じ！」と思ったけれど、最後に「4 組結婚」とあったので「え！あれ？」と思いました。
D：僕も二組しか把握していないんですよね。僕は二組だと思っていました。
C：二組ですよね～。
A：D さんは原作を読んでいるのに！
B：C さんの本は、誰と誰が結婚しているんですか？
C：私のでは普通に…。
A：おそらくオーランドとオリバーですよね。
B：タッチストーンはもう出てこないんですか？
C：誰ですか？
B：タッチストーンという道化、ピエロみたいな人がいるんですけど。
C：出てきません。
B：出てこないんだ。主人公と一緒に逃げるいとこはどうですか？
C：いとこは出てきます。
B：シーリアですよ。
C：出てきます。
B：結婚しますか？
C：オリバーと結婚しますよ。
B：もう 1 組は誰でしたっけ？

A：フィルヴィアスとフィービですね。
B：そうですね、その辺りは省かれているんですね。
C：出てこないです。
B：すごいな…。
C：すごいです。でも男女の入れ替えというのは、ちゃんと書かれていますよ。男女の入れ替えをしながら演技をしていて、相手の気持ちをさぐるということは書いてあります。そこは省きようがないんですね。でもいらない人は省かれています。
A：フィービという人が、男装しているロザリンドのことを好きになるんですよね。
C：へ～。
A：色々と複雑なんだけれど、ロザリンドは「あなたは、このような条件がかなったら、あなたが本当に好きであるであろう人と結婚するんですよね」というようにフィービを説得するんですよね。蓋を開けてみたら 4 組のカップルができている、それが種明かしみたいになって楽しい劇なんですよね。多分。
D：そういうことかー。だとしたら、吉本新喜劇みたいな感じなんですね。
B：そうそう。
D：新喜劇っぽいですよね。最後大団円を迎える感じとか。
B：吉本新喜劇だったら、山田花子がロザリンドを演じますね。
D：あ～。新喜劇だと思えばいいんですね。「おいでやす」みたいにギャグをかましながらみんな入ってくると思えば楽しいんですね。
A：そうかもしれません。
B：喜劇だから、新しい人が登場したときには「アッハッハ」と笑うと思うんですよね。だから道化としてのタッチストーンが出てくるんですよ。そこにジェイキスというツッコミの皮肉屋がいます。
D：役回りがそれぞれあるということですね。なるほど。
B：そしてそのジェイキスだけ森に残るんですよね。他の人は宮廷に戻るんですけど。
D：狂言回し的な人がいるんですね。リア王に出てくるホレイショでしたっけ？これも狂言回しなんですよね？
B：ホレイショは『ハムレット』じゃないかな。
D：『ハムレット』でしたか。そういう役の人を置くんですね。シェイクスピアは。
B：置くというか、演劇はみんなそうですよね。みんな訳がわからなすぎると良くないから。まともな人を置く、だから他の人が面白くなる。『ハムレット』は最後悲惨ですもんね。A くん読んだんですよね？
A：読みました。
B：もうなんか「そして誰もいなくなった」的ですよね。
A：『お気に召すまま』の内容はそんな感じで押さえられたかと思います。福田恒存さんの解説にも書いてあったと思いますが、森と町、町という言葉は出てきませんが、森と公爵たちの住んでいるところが場面として対比されています。そしてこの物語はあくまで「森で起きていくこと」なんですよね。森だから不思議な力が働く。第一幕の途中で出てきるロザリンドのセリフが重要かなと思いました。「運命と自然」が対比されているセリフです。第 1 幕第 2 場―2 なんですが。私の本でいうと 19 ペー

ジにあります。シーリアとロザリンドが語るシーンです。美しい人は心が醜いし、心がちゃんとしている人はたいした器量を持たない、というようなことを言います。これも前の『マクベス』で話題になったところの内面と外面の話かなと思います。そんな比較をしつつ、さらに自然と町とを比較しています。今でいう「自然と都市」といった比較にあたるのかなと思います。自然に注目して、森が不思議なことを起こしていく。つまり人間の意図を超えたものとして森が描かれているのかなと思いました。
D：面白いですね。「森」が大切なんですよね。今回僕は『快読シェイクスピア』という本を読みました。河合隼雄さんと松岡和子さんが対談している本です。だいぶさらっと読みましたが、やはり河合隼雄さんの言うことは面白いです。この本の中で「森」の話になった時に「日本人は森を知らない」と言うんです。日本人は森と聞いて山を思い浮かべる、と。本当の森は平らなんですね。確かにそうですよね。日本は巨大な火山だから、山じゃないところはありません。だけど、ドイツの森とかはずっと平らな森が続いているんですよね。それを日本人は地理的に想像できないようです。河合さんはドイツで、松岡さんはイギリスで、実際に森に行ってみたようです。そうすると、今まで森を知らなかったと思ったようなんです。魑魅魍魎が跋扈する。森というのは人間をおかしくさせる、そういう場の力というか、そういうものを森がもっているという感じがわかるんだ、と言っています。どこまでも続いているから。坂道ではないですからね。魔女裁判なんかの時代にも、「森に魔女が住む」というイメージがあったりします。そういう「森」が物語の中心にあるんだなと思いました。
B：ちなみに、ストーリーの確認なんですが、お兄さんのオリバーが主人公のオーランドを追放しますよね。後半になって、突然オリバーが森の中にやってきます。実は向こうでライオンに襲われたんだ、というような話をしますよね。そして弟が怪我をしたというような時の前に、和解はしているんですよね？殺そうとして追放した人がどこでどうやって和解したのかなと思ったんですけど。
A：それも書かれていないように思います。私は、ライオンから助けてくれたから仲直りをしたんだと思って読んでいました。
B：あ～。弟を殺そうとしたお兄さんだったけど、ライオンに襲われている時に弟が助けに入ったから、ということですね。
C：うん。その時に、オーランドはその時に片腕を怪我したとありますね。それを見てオリバーはオーランドに救われたと知ったとあります。
B：了解しました。
D：それ（『シェイクスピア物語』）が一番わかりやすいと思うんですよね。
B：20 ページだからね。登場人物は半分だし。
D：「変装した」とか書いてくれているんですよね？こっちなんて本当に訳がわからないんですよ。急に分裂したの？と思います。怖いんだから。
B：そう。仮装しているのに名前は変わらないですもんね。
D：変わらないんですよ。「あなたのことが好き」と言っていた人が、「全然好きじゃなくなるかもしれないけどね」みたいに言います。解説でわかったんですけど、あれは試しているんですよね。こんなひどい女ですよ、と。その時は男装しているんだけど。突き放して愛を試しているんだって書いてありました。「そういうことかよ」と思いました。
B：そこ面白いじゃないですか。…あれ？
D：面白い？まあ面白いけど…。

A：私は解説も読んだはずですが、なんで男装をしているのかはわかりませんでした。
D：そうです、そこでなんで男装したんだろうと思いました。
B：違いますよ、男装しているのは、ロザリンドがシーリアが追われているからです。発見されたらまずいですよね。だから男のふりをして逃げているんですよ。
C：そうです。お城から出る時にもうすでに男装をしています。
A：でもシーリアは男装しませんよね。
B：シーリアも男装しているよ。
C：シーリアは女装ですよ。若い娘の姿のままです。だからお兄ちゃんと妹として逃げるんですよね。
A：そうそう。
D：あ～。そういうことね。
B：そうか。つまり変装はしたんですよね。
A：ロザリンドは背が高いから…とありましたっけ？
C：そうそう。
A：だから男のふりをできるんですよね。
B：そうだそうだ。そして、相撲の時に偶然会ったオーランドと再会しても「私はロザリンドです」とは言わないんですよね。
A：そこも謎でした。
B：「追われてきたから男装しているんですけど、実はこういう者です」と言えばいいのに言わないんですよね。
D：なるほどね。
A：そして変装したロザリンドは「恋の病を治したことがあります」と話し始めるんです。「私を本当に恋している相手だと思って振る舞いなさい。そうすれば恋の病は治ります。」というように言います。
B：本当は好き合っている同士がそういうやりとりをしているんですよね。それを面白いと思わないかな…。
D：面白いけど…。
A：この本は難しかったですね。
B：お互いに恋の手ほどきをして演じている時がありましたよね。ここ面白いと思って折り目をつけたんですけど、「時間の速さが人によって違う」という話があります。
A：はいはいはい。
B：こんなセリフの掛け合いが面白いなと思ったんです。時間っていうやつの進み方は相手次第で違うと。並足、跑足、早足、完全停止。それはＣさんの『シェイクスピア物語』には無いですよね。
C：無いです。
A：絶対ないですよね。
C：書いてないです。
B：『シェイクスピア物語』はめっちゃ早足だからないですよね。跑足ってなんなの？とオーランドが聞くんです。ロザリンドは時間がなかなか進まないことを例えるんですよね。若い娘が婚約してからいざ式を挙げようとして、その間がたとえ 7 日間だとしてもその隔たりはおおきなものに見える、そこには 7 年の歳月が横たわっているように思える、と言います。まさにこの人たちのことを言うわけ

です。本当は今にも「ロザリンドです」と言いたいんだけれど言えないから。並足は、痛風を患っていない金持ち、と例えています。なんだそれって。早足は、絞首台へ引き立てられていく泥棒だと。
A：それってどこでしたっけ？
B：93 ページくらいですね。多少はページが違うと思います。第 3 幕の 12 場です。完全停止が何かというと、時が完全に止まっているのは、休暇中の弁護士だって。これも意味がわからないですよね。裁判と裁判の間を眠って過ごすから時が経つのを感じないって。ちょっとよくわからないですよね。
C：へ～。
A：ありました。
D：こういうのも、別の本で読みましたが、シェイクスピアは時事ネタをぶっこむらしいですよね。だから、休暇中の弁護士に関する事件が当時あったのかもしれないですよね。
B：かもしれないですね。
D：そうすると観客はわかっているから「ああ、あれね」となる。今でいう「これは例えるなら『任命拒否』だね」とかいうことですよね。でもその資料がないから、わからないんですよ。
A：我々にはわからないんですよね。
B：そうそう。
C：ふーん。
B：そうか、だめか～。
A：最後、ロザリンドのお父さんとオーランドが、「そう言えば、ロザリンドに似ていますよね」と言い出しますよね。あれも「おもしろ」なんでしょうか。
B：だと思います。だって今まででもわかったでしょ、って感じですよね。
A：今更「面影があるな」と言いますからね。そこがこの劇の「おもしろ」ポイントなのかな、と思って一応線をひきました。
B：そうそう。そして、結婚する時は、自分のお父さんに了解を取らないといけないんですよね。だけど、自分の身分を明かす前に、了解をとっているんです。お父さんもわかる前に認めると言ってしまっています。父は、まさか自分の娘から確認されたとは思わずに、いいよと言っているわけです。そして明かされて「お前だったのか！」となって、娘は「結婚してもいいと言ったわよね」となります。
A：そうそう。
B：娘が種明かしをしないまま父に許可をもらう時に、観客は「プププ」となっているんですよね。
D：あ～。
B：ずっとそういうおもしろさなんですよね。きっと。
D：そういうことか。
B：そして最後にロザリンドが観客に向かって話し出すんです。今まで劇の中だけでやっていただけのはずなのに、急に観客の方を向いて…。
A：口上を述べるんですよね。その時に「本当は男性が口上を述べるべきだけど…」と話すんです。
B：女だてらに…ですよね。
A：もう男なのか女なのかもう訳がわからなくなっているから、ここでも笑うんですよね。
B：それを男っぽくやるから、観客はわっと盛り上がる。でも演じているのは男の人なんですよね。
A：そうそう。

C：うんうん。
D：これを 1600 年ごろに書いているんですよね。関ヶ原のころに。だから、もう歌舞伎だと考えたらいいんですよね。歌舞伎も女装しますから。
B：そうですね。見たことがないからわからないけれど、歌舞伎にも笑いがたくさんあるんですよね。
D：そうですよね。そういうことですよね。口上もあるし。
C：芝居が情報伝達、とありました。殺人事件とか王様が変わったとか、そういうことを芝居の現場で伝えていたようです。そして芝居にきた人たちがみんなに伝えて街が活性化する。テレビとかラジオとか何もないから、違う町からきた芝居の人たちが「この国でこういうことがあったんだよ」と芝居を観にこれる市民に伝えたらしいです。そこから情報がさらに色々な人たちに広まったようです。
C：びっくりしたのが、シェイクスピアが死んだ年と徳川家康が死んだ年が一緒なんです。1616 年。
D：へ～とはならないですけどね。
C：あんな時代にね。シェイクスピアすごいですよね。
B：当時はお互いに知らないわけですからね。え！家康死んだの！とはなっていませんよね。
C：そうなんですけど。
B：後の人が知って、たまたまそうだったということですよね。
C：そうなんですけど。
B：ダイジェスト版なのにそういうことは書いてあるんですね。
C：そうなんです。
D：それが一番いいな。
C：すごくいいですよ。さっき『ハムレット』もこれで読みたいと思いました。これで読んだらすぐにわかりますよ。
D：いいわ～。
A：前回の読書会を、私の中でまとめると「『マクベス』はファイトクラブだ」ということでした。
B：私の中というか、D くんがそう言ってましたね。
A：前回の報告のサムネイルを作ったのですが、そこに載せました。
B：見ました。「『お気に召すまま』は吉本新喜劇だ」ですかね。
A：ファイトクラブ的要素って、今回の『お気に召すまま』にはあったのでしょうか。
B：ファイトクラブ的要素はないんじゃないでしょうか。いわゆる自分で気がつかないもう一人の自分、とかいうことですよね。
A：そうですね。
B：それ今回はないんじゃないですかね。意図的にやっているわけですから。別人格を意図的に演じているという、ファイトクラブの逆パターン、それはあるかもしれないですよね。ロザリンドが。
A：たとえば、今回でいうと、前の公爵の名前が無いですよね。
B：お父さんは名前がないんでしたっけ？
A：そうですね。前公爵がマクベス夫人的な役割を果たしているとか…。あとは、道化であるタッチストーンも、別なものでいう魔女的な役割を果たしているような気もします。他者として出てくるというか、運命を客観的に見ている視点として描かれているように思います。それは演劇だからかもしれないですが。

B：影のような感じですね。
A：そのように書かれているのかなと。
B：喜劇はそういうように書かれていないような気がします。わからないけど。そんなに複雑に読んではいけないんだと思います。
A：確かに。
D：喜劇はね。
B：舞台上でガチャガチャみんながやっているのを、観客が笑っているような感覚で読んだらいいんじゃないでしょうか。
A：その中でも、都市から抜け出て物語が展開されるというところで、都市に対する批判なのかと思いました。人間の力だけではなくて牧歌的な生活をしている羊飼達と、公爵達の生活が比較されていますよね。公爵的な生き方を批判しているのかな、というか。
B：どうなんだろう。
A：全然賛同は得られていませんね。
B：そんな深く読まなくていいんじゃないですかね。例えば、C さんがロザリンド役で読んだ時に、最初は普通に女性として話しますよね、そして途中でギャニミードになるわけです。C さんが男の子風の読み方をしている時点で面白いじゃないですか。そのギャニミードが恋の手ほどきをする時に、また女の子風の演技をあえてする、というような場面を観て、クククと笑う。そういう感じなんだと思います。多分、読み合いをしたら面白いんだと思います。一周回って C さんでしょう、となるんです。
A：ロザリンドを演じる人は相当にハードですよね。すごい役者だと思います。
B：当時もそうだったと書いてありましたね。最近だと女性が演じていたりします。キャサリン・ヘップバーンが演じているときの写真が『シェイクスピア大図鑑』には載っていました。
C：へ～。
B：キャサリン・ヘップバーンが、この役について、「自分がどれほどの役者か試す絶好の機会で、私はそれを知りたかった」と語ったようです。相当に難しいということですね。
D：そうですね。
C：確かに。
A：他にどうでしょうか。
D：解説で「自己欺瞞」については触れてありました。福田さんが言っていたのは「自己欺瞞」ということです。この河合隼雄がした解説には、『お気に召すまま』のセリフに「人生は舞台だ」というようなものがあるとありました。
B：そうですね。
D：人は皆、男も女も役者にすぎない、というやつです。これに河合さんは注目しています。演じること、つまり何重にも演じているわけです。舞台の中で演じている人を演じている。これってこの社会そのものでもあると河合さんはいいます。ペルソナと自己、エゴ、そんなユングの議論がありますよね。ペルソナとは仮面だから、この社会で生きていくためには誰もがペルソナを身に付けるわけです。それは色々と着脱していかなくてはいけない。ずっとペルソナを外せない人は困ってしまいます。家でも校長先生だと困りますよね。いろいろな文脈にあわせて、そういうものを着脱するというのが、人間のあり方です。その辺りに対してシェイクスピアは自覚的だったのではないか、と。一方で、西洋

の伝統では、変わらない一人の自我という、一つの主体がいます。「The one」というようなものですね。神の前に立つ自分です。「自我は一つ」幻想がありますから。河合さんが言っているのは、アメリカで多重人格が多いらしいんです。多重人格障害というのでしょうか。アメリカでは「自我は一人」幻想がものすごく強い、けれど自分はいろいろなペルソナをまとっている、そこで分裂として発症するのではないか、と言っています。日本ってその辺りが曖昧です。「自我は一人」幻想ってないと思います。沖縄だと、人間には七つの魂がある、という話があります。そういうものがないから、曖昧に適当にやっているから、日本には多重人格障害が少ないんじゃないか、というように河合さんは言っていて、面白いなと思いました。

A：演じることを演じさせているから、舞台そのものを例えに使っていますよね。

D：舞台が世界のメタファーですよね。

B：そしてそれをジェイキスが言うんですよね。真ん中らへんですね。「全世界が一つの舞台、そこでは男女を問わぬ、人間は役者に過ぎない…」というのが一番有名なセリフです。その後、人生の７つの時代と言います。

A：そうなると、西洋の統一した自己といったものをシェイクスピアは想定していないということですよね。

B：そうだと思います。

D：順番として、西洋近代的自我はデカルトが 1600 年ごろですよね。そこから本格化します。國分功一郎『中動態の世界』でも言っていますが、中世の西洋って今とは違っていて、かなりアニミスティックな世界が残っていたようです。そういう意味では、シェイクスピアは近代人未満の近代人なのかもしれないですね。森のそういう感じを信じて主題化していることからも言えると思います。

A：近代のはざまにいる、という話は前回も出ていたように思います。西洋的な統一的自我があった上で、この物語を書いているのではないということでしょうか。

B：それは違いますよね。西洋的自我はまだありませんから。

A：当然そういうことですよね。

D：順番としてはそういう感じだと思います。そういうものが残っていた西洋というものを知ることのできる資料としてシェイクスピアはあるような気がしますね。

B：文学の世界で西洋的自我が現れたのはいつ頃なんでしょうか。

D：文学の世界でですね。

B：シェイクスピア以後ということになるので…。

D：そうですね。

B：1700 年、1800 年代ですよね。何の作品になるのでしょうか。その年代の有名な著作って何でしょう。小説ではないですが、ルソーの『エミール』とか…。

D：その辺りの時代ってよくわからないですね。ヘッセとかはもっと後ですもんね。

B：後ですよね。そういう視点で調べたことはないですね。

D：カフカはどうでしょうか。

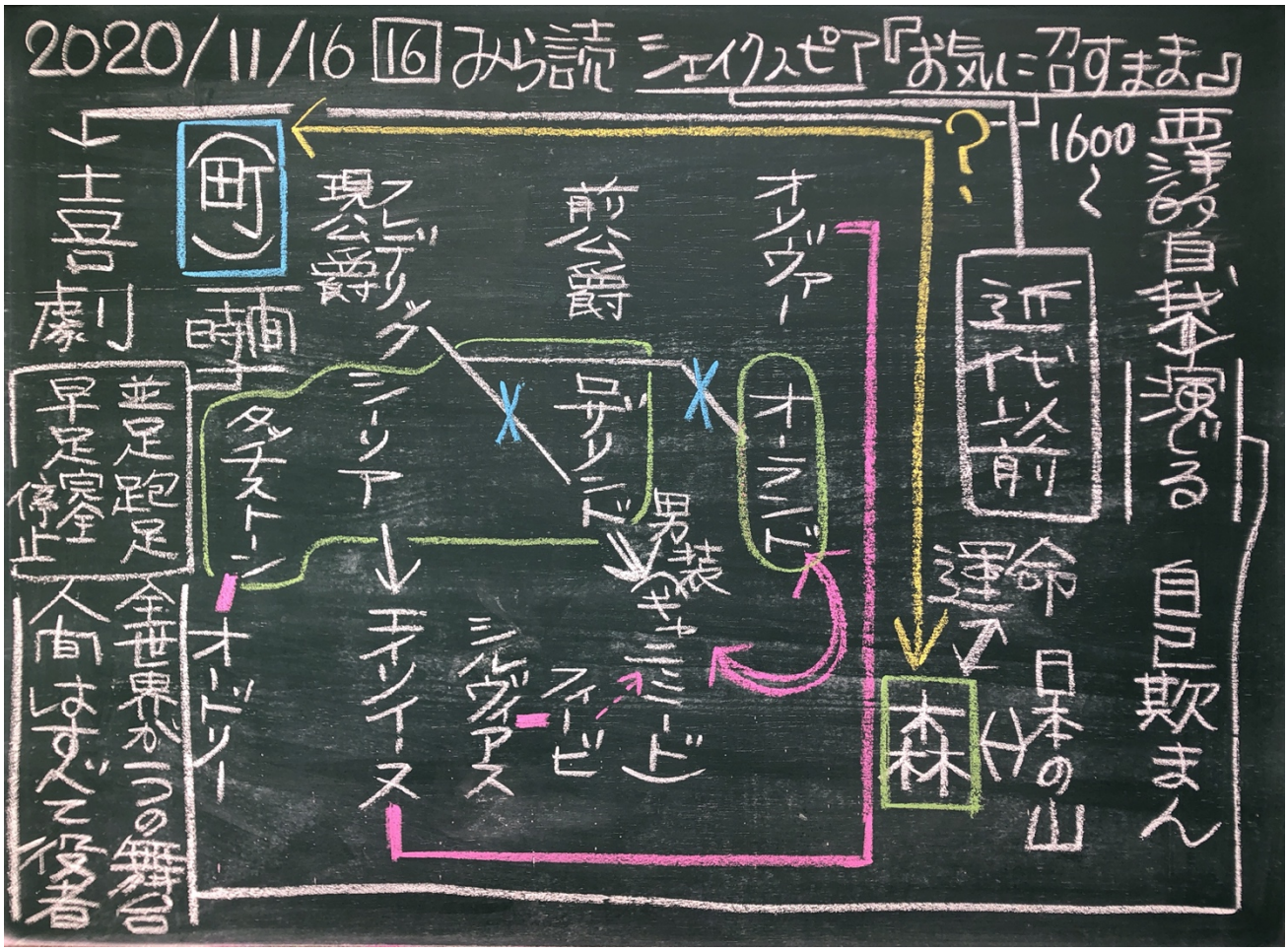
A：カフカは一人にも色々な見方があるというような書き方をしているように思います。

B：カフカは 1900 年代ですよね。あの頃になると実存主義とかになっているので、近代的自我の批判に至っていますよね。

D：近代的自我を前提とする、ということですね。
B：ちょっとわかりませんね。
A：デカルト的な小説ですよね。自我が描かれている舞台なり小説なり、あるとおもしろそうですね。入れ替わっていく感じがわかると面白いと思います。
B：いわゆる哲学との接近というんでしょうか。哲学と文学の相互作用ってどうなんでしょう。
B：そろそろ次ですね。もうシェイクスピアはいいですね。悲劇と喜劇読んだので。
D：C さんの本がわかったのでまだいける気がしますが。
B：あと 2 回くらい続けたら、みんなその本を持っているような気がしますね。それはやめましょう。
D：その本が一番情報量多いんですよね。
B：「こいつら読書会と言いながらダイジェスト版で読んでるぞ」って、「岩波少年文庫使ってるよ」って言われちゃいますよ。
C：もうシェイクスピアの戯曲集が売ってなかったんですよね。
B：別なところにあると思いますよ。絶対にありますから。
C：コーチャンフォーになかったんです。
B：コーチャンフォーにはめちゃありますよ。世界の古典の棚は別にありますからね。ちくま学芸文庫の隣に。
C：ちょっと探せていないんですね。
A：次は、『クリスマス・キャロル』に向けて…。
B：アンデルセンを読もうと言っていたはずですね。
A：アンデルセンですね。
B：『絵のない絵本』。
A：『絵のない絵本』もいろいろな訳が出ているんでしょうか。
B：いろいろな訳が出ています。いわさきちひろさんの絵がついたものも有名みたいです。安さでいうと、新潮文庫がいいですね。
D：いろいろな話が入っているんですか？
B：月が空から世界中のいろいろな人間の 1 日をみていく、という物語です。第 1 夜～と続いていきます。月が語るんです。ヨーロッパや中国、インドに行くんですね。月の意思も感じられます。人間が出てこない話もあります。ストーリーはつながっていないけれど、月目線のエッセイということですね。
A：書かれたのは何年でしょうか。
B：書かれたのは…1839～1840 年みたいです。アンデルセンは元々舞台に立つ役者になりたかったけれど、なれなかった。『絵のない絵本』にもそんな登場人物がいます。いろいろな国に行っていますが、自分が住んだことのある国も結構出てくるんですよね。
A：それは童話でしょうか。いわゆるアンデルセン童話の一つ何でしょうか。
B：童話なんだけど、結構大人向けだと思います。子どもが読んでも…寝る前に一夜分だけ読むのは適しているかもしれません。子どもに読み聞かせる絵本って、読んでも意味はないという作品がありますよね。なんとなくイメージして寝るというような。あと、後に書き足されている部分があるようです。最終的に 33 夜になっています。
A：本人によって加筆されているということですね。

B：それが出来上がったのが 1854 年とあります。20 年くらいかけて加筆されたものが今読めるものみたいです。デンマークではほとんど相手にされなかった、ドイツとかイギリスで評判になった、とあります。半分自伝的なんじゃないかなと思います。
D：いいんじゃないでしょうか。
B：これを読んで語れるかはわかりませんが。いい本を読んだという感じだと思います。その次が、これですよね。『クリスマス・キャロル』。世界の短編はほとんど買っています。そして、これ、『やし酒飲み』。
D：読みましょう。
B：これは買った二冊目です。無くしてしまったので。『やし酒飲み』を無くしてもう一回買うのは切ない。
A：アンデルセンでいきましょう。
B：『百年の孤独』も買いました。ラテンアメリカに行く前に。文庫がないんですよね。世界文学を辿ると、20 世紀最大の著作と呼ばれているものが 2 つあります。一冊がジェイムズ・ジョイス『ユリシーズ』、古代ギリシャ神話のオデュッセイアを現代風にパロディした小説です。それは 4 巻本です。もう一つがマルセル・プルースト『失われた時を求めて』です。
D：めちゃ長いんですよね。
B：十四冊くらいあるような気がします。
D：きついよね。
B：ちょっと読んでみたら面白そうです。
D：最後だけは知っているんですよ。
C：最初と最後だけでいいです。
B：それは映画テネットのあらすじと同じくらい言ってはいけないものです。
D：マドレーヌの香り、なんですよね。
A：それは『プルースト物語』を読まなくてはいけないですね。
B：多分『失われた時を求めて』を 40 ページくらいにまとめられていると思います。
D：あ～。
B：登場人物が 10 分の 1 くらいで。
C：ありそう。
B：そんな長いのもチャレンジしてみたくなりますよね。
D：大作ね。
A：心が折れそう。
D：『肩をすくめるアトラス』とか。
B：ギリシャ悲劇は半分以上読みましたよ。『オデュッセイア』とかは本当に面白いです。今も読んでいますが『イーリアス』とか。トロイア戦争の話です。
D：『ギルガメッシュ叙事詩』は？
B：それはもっと昔ですね。紀元前 600 年ごろがホメロスの時代ですよね。B さんは前に『ゲド戦記』を読んでいましたよね。
B：一巻だけ読みました。

D：『ゲド戦記』はそういうものをコラージュしている感じがするんですよね。
B：ファンタジーの類はみんなそうな気がします。『指輪物語』だってそうですよね。全ての物語の源流が『オデュッセイア』『イーリアス』なんですよね。
A：そういえば、アジアの作品が全然ありませんね。手薄です。
B：アジアは『阿Q正伝』でしょう。みなさんに読んで欲しい。『阿Q正伝』は完全にコントですからね。吉本新喜劇というより、コントですね。笑わずして読めません。
A：私はシェイクスピアで笑えなかったから不安です。
B：あ〜。期待しているのは、アフリカとかラテンアメリカとかです。雰囲気が全然違いそうですよね。
A：とりあえず次はデンマークですね。
B：出身地はデンマークです。そして次はデンマークからイギリスですね。
C：イギリスにいたいな。
B：またイギリスに戻るという感じなんですね。まあクリスマスだからOKでしょう。
A：日程はどうしましょうか。いい感じの日はありますか？
…
A：では12月1日(火)16:30〜17:30でお願いします。本日はありがとうございました。



みらいつくり

第17回 読書会 @zoom

【日時】
2020年12月1日(火)16:30～17:30

【課題図書】
アンデルセン『絵のない絵本』新潮文庫
※新潮文庫以外の図書を用いてくださっても構いません。

【参加方法】
興味のある方は、以下事務局までご連絡ください。
zoomのアドレスとパスワードを添付して返信いたします。

事務局：みらいつくり研究所　松井
Eメール：matsui-ka@kjnet.onmicrosoft.com

「ラジオ参加」も大歓迎！

「ちょっと議論には加われない」「その時間は作業しているから」
そんなみなさんにおすすめの「ラジオ参加」。
zoomのカメラをオフにして、ラジオみたいに聞き流す。
そんな「学び」があっていい。そんな「参加」があっていい。
興味のある方はぜひ事務局にお問い合わせください。

みらいつくり大学校企画

みらいつくり大学校企画

第 17 回みらいつくり読書会@zoom 記録

第 18 回は、2020/12/14 の 16:00～17:00 に行います。興味のある方は下記事務局までご連絡ください。

事務局 みらいつくり研究所 松井

E メール：matsui-ka@kjnet.onmicrosoft.com

【課題図書】	【実施日時】	【参加者】
アンデルセン『絵のない絵本』	2020/12/1 16:30～17:30	A,B,C,D,E(＋ラジオ参加 3 名)

内容（※語尾を中心に編集しています）
A：早速始めていきましょう。あらすじを説明する内容ではなかったように思います。大まかな枠組みとしては、「月」が「わたし」に語りかけてくれたことを第一夜から第三三夜まで短編のようにして書き連ねてありました。「月」はいろいろな場所に行くことができます。それは決まって夜です。「月」がいろいろな場所で見たことを、「わたし」が本にしたということです。 B：ちなみに、月目線ではない部分もありましたよね？ C：今日は月が話してくれません、といったような夜があったように思います。 B：そして、誰かが話していて途中で月の話になる…という部分があったような…。 A：月が出ないという部分はありましたが、私は全部月が話してくれたものだと思っていました。 B：ちなみにみなさんはどの訳を読みましたか？ A：私は新潮文庫、矢崎源九郎さんの訳を読みました。 B：同じです。D さんだけ違いますね。 D：これは、角川文庫です。自分では買いに行くことができなくて、夫に「仕事帰りに買ってきて！」とお願いしました。 B：誰が訳したものですか？ D：これは川崎芳隆さんという方が訳しています。 B：へー。やはりいっぱいあるんですね。僕は最初、新潮文庫を買って読みましたが、その後に評判が良かったこれを…。 A：いわさきちひろさんが絵をつけたやつですね。 B：そうです。山室静さんという方が訳をつけたと書いてあります。先に言うと、この訳はあまり良くなかったように思います。 A：もちろん、絵がついているんですよね？ B：そうです。こんな感じ。でもいわゆる「いわさきちひろ」さんらしくはないように思います。こんなテイストです。 A：そっか、今見せていただいた箇所は白鳥の話ですね。 A：それぞれに印象的なところがあったら紹介してもらえるといいかもしれませんね。 B：好きなところがあったら朗読したらいいかもしれないですね。これって朗読したらいい話ですよね。E さん来ましたね。E さんはどの本を読みましたか？ E：すいません。僕は変わった本を読みました。これです。

B：大きい。
E：図書館にはいろいろありました。「大活字文庫」と言うのがあったので、それにしてみました。借りてみたら、尋常ではない「大活字」でした。こんな感じです。
D：見やすい！
E：大きいとは聞いていたけど「こんなに大きいの！」と思いました。これは読みにくかったです。めくるのが大変でした。
B：それはベッドの中で寝ながら読むのは難しそうですね。
E：今日借りて今日読みました。
B：訳は誰ですか？
E：訳は、矢崎源九郎さんです。
A：同じですね。こっちはこんなに小さいのに。
B：290 円ですしね。
D：安い。
A：私はどれが好きか、印象的かというと、第九夜です。グリーンランドの話です。
C：氷山を墓標にする、というような話ですね。
A：そうそう。氷の下に流すのか流さないのか、というような話です。
B：あ～。割と「えっ」というような話ですよね。なんで？って感じ。
A：そういう地方の、グリーンランドの、北極圏の、死に関する文化ってあるんだなって思いました。死が悲しいものとしては描かれているのですが、自分たちで死に方を選んでいるというか、「死んでからの安息を与えるのも海だ」と書いてあってすごいなと思いました。
A：全体の印象としては、アンデルセンって『マッチ売りの少女』とかにわかりやすいのですが、「少女の貧しくて清らかな心」といったものを、「良いもの」として描いているように思いました。それってキリスト教の影響を受けていると思いました。『絵のない絵本』に出てくる「わたし」は、アンデルセンをあらわしていると思いました。「月」が話したことも、アンデルセン自身が旅をして見てきたものを描いていると書いてあったので、「月」もアンデルセン自身なのかもしれません。自伝的だ、ということですね。アンデルセンが何を批判したかったのかについてはよくわかりませんでした。
B：批判はしていないんじゃないですか。
A：ですよね。
B：A くんは大体批判として読みますからね。
A：もう作家はみんな芥川だと思って読んでしまっていますね。
B：確かに。
A：みんな芥川目線だと思っています。
B：この本には風刺性はあまりないですよね？
A：そんな気がします。
E：そうですね。
C：好きな作品…。私は気合を入れて、どの話がどの国なのかメモをしながら読みました。全体的にはイタリアが多かったです。調べてみるとアンデルセンはイタリアが好きで旅行によく行っていたようです。そんなことが影響されていたのではないかと思いました。単純に童話、子ども向けの創作なの

で、教訓じみたものは『グリム童話』なんかに比べるとないのかなと思いました。私が好きなのは、一番最後に読んでいたから…第三三夜ですね。女の子が「パンにバターがついていたら…」と祈るシーンが印象的です。全体的な印象というと、A さんが言っていたように、貧しい女の子というか、アンデルセン自身が貧しい出身ということもあって、「そうであってほしい」という願望も描かれていると思いました。社会的弱者が主人公であったり救われるような作風であったりすることが多いのかなと思いました。調べてみると、アンデルセンは学校にも行っていなくて本当は俳優になりたくて、というような背景もあるようです。当時、ドイツの作家ゲーテがすごく人気だったようです。ゲーテが死去した年に、アンデルセンが回想録を書き始めています。影響されているのかな…と勝手に思っていました。

B：ゲーテと同時代人なんですね。

C：そうなんですよね。作風が似ているわけではないように思うのですが、同じ時代を生きていたなら影響は受けているのかなと思いました。『グリム童話』はもう少し前の時代ですよね。

B：アンデルセンよりも前ということですか？

C：アンデルセンより前だと思います。前に B さん絵本の講座を受けていたじゃないですか。あれはどうされていますか？

B：はっはっは。

C：私も同じ講座を受けていたんですけど 5 月にやめたんです。

B：そうなんだ。

C：そうなんですけど、久しぶりにテキストを出して読んでみました。アンデルセンとグリム童話のことが書いてあったのでそこを読んでいました。

B：すいません。一応最後まで DVD が来ていました。でもそのまま修了できないまま…。

C：『グリム童話』はグリム兄弟が民話とか人の中で代々聞かされてきた話を編纂してまとめた物語なんです。アンデルセン童話はアンデルセン自身の創作なんです。アンデルセンの方が年齢幅にとらわれず人気だったと書いてありました。教訓じみた『グリム童話』よりもアンデルセン童話の方が人気だったんだなと思いました。以上です。

B：ゲーテと同じ。そしてディケンズとも同じなんですよね。

E：なるほどね。

B：ディケンズとは接点があったようです。「ディケンズとの友情」と書いてありました。手紙をやりとりしていたようです。アンデルセンは一度、ディケンズの別荘に行ったらしいです。でもディケンズの娘ケイトが「父親はアンデルセンを痩せこけて退屈な男だと評していた」と当時を振り返っていたらしいです。アンデルセンはディケンズに嫌われたと思って友情を取り戻そうとしたが、ディケンズが素っ気ない手紙を返して、二人の友情は終わりを迎える…とあります。ディケンズも元々貧しい人ですよね。

E：そうなんですね。

B：おそらく次読むであろう『クリスマス・キャロル』ですよね。ゲーテも同じ時代なんですね。マルクスも同じくらいですね。

E：そっかそっか。なるほど。

A：同時代人がわかってくるとどんな感じだったか少し想像できますね。

D：私は例の如く全部は読めませんでした。第一夜から第三夜を読んで、その後は最後の第三三夜を読んでしまいました。
C：衝撃の読み方ですね。
B：この本はどこから読んでもいいやつですからね。
D：そうだったんですね。最後の話を読んだときに、どこから読んでもいいやつなんだなと思いました。B さんが言っていたように、子どもたちに読ませてみました。お布団の中に子どもたちを寝かして読んでみました。どこで引っかかるのかなーと思ったら、日本語の書き方でした。「～でした」ではなく、「～あの人が生きている、と。」で終わる文章があります。そこを子どもが気にしていました。内容ではなく表現を気にしていました。アンデルセンが書く子どもの表現ってかわいいなと思いました。すごい純粋な子どもの表現をしますよね。すごくかわいいと思いました。三三夜まであるので、少しずつ読み聞かせようと思います。
B：確かに、読み聞かせするのにいい感じですよね。
D：そうなんですよ。２ページとかなので、ちょうどいい量ですよね。
B：読み聞かせをするとリズムがわかるんですよね、多分。ということなんだよな、と思いながら黙読していました。
A：でも、怖い話もありますよね。途中。
E：うん。
B：あるある。
D：そうなんですね。
A：これ夜に読まれたら寝られなくなるっていうのもありました。
B：あ～。
D：それだけは避けて読もうかな。
B：幽霊が～とか。
C：ありますね。一九夜とか。自殺しちゃうお話しですよね。
B：あ～。あったね。
E：僕はこれが一番刺さりましたね。
B：一九夜が？
E：一九夜が。一番印象に残りました。切実なものを感じて。あとがきを見ると、彼は役者になりたくて挫折をしたんだと書いてありました。自分のことなんだなと思いました。
D：ちょっと印をつけておきます。
C：読まないように。
D：そう、読まないように。
B：読んでみて途中であれっとなっても止められないですよね。
D：これだった！みたいな。
B：読み続けたら「それは自殺者だった…」。
D：後戻りできませんね。
E：一回自殺しないんだけど、やっぱり自殺するんですよね。
B：そうなんだよね。途中なるほど～と思うんだけど、やっぱりその後自殺するんです。

A：この話が切実、というのはわかるような気がします。
E：彼の中の役者という人格は死んだんだと思います。役者を諦めた時に。その話なんだと思います。
E：僕は、字がでかくて大変でした。普通の本のタイトルくらいあるんですよね。弱視の人とかが読む本なんでしょうね。
B：確かにそうかもしれないですね。
E：図書館って調べるとたくさん出てくるんだけど、どれがどれかわからないから、出版年が新しいものを選びました。するとたまたまこれでした。
B：確かにそれは弱視の人のためのものかもしれないですね。
E：高齢者の方とか。そういう感じがしました。月の話なので二八夜とか三〇夜で終わるのかなと思いました。月の満ち欠けだとそうですよね。三三まであるから読んでいて「続くんかい」と思いました。
B：書き足したみたいなんですよね。
C：途中で第一版はつくられています。
A：でも最初に出版された時から中途半端な数ですよね。
B：1844 年の第二版において三一夜を包括するに至った、とあります。一応、一月ということなんじゃないですかね。でもその後なぜか 4 年後に第三二夜と第三三夜が付け足された。
E：へ〜。
B：なんででしょうね。
E：一月の話かと思ったら裏切られた、ということ。あとは一九夜の自殺の話が印象に残った。あとは、自然の描写がいいな、素晴らしいなと思いました。花鳥風月というか。人間と同じくらいか、それ以上に、海とか木とか鳥とか花とか虫とかが出てきます。僕は好きでした。アンデルセンは自然に目を向けている人なんだなと思いました。発想が面白いです。世界を月の目線で旅するアイディアが面白いです。我々は月を見ているんだけど、月も我々を見ているんだ、そういう考え方があるじゃないですか。自分が海を見ているのか海が自分を見ているのかわからなくなってきたという話です。そんな感じもすごくいいなと思いました。月の視点に立つことで物事を俯瞰するということが語り口として新鮮でした。「人の生き死に」に関するスケールの大きさ、「こんなことを見てきたんです」と言っても月は人間の歴史を見てきたことになります。神話のような話になります。「モーセがシナイ山に行ったのを見てきたんですよ」ということがあります。私たちも飛行機に乗って街を見下ろすと「自分の人生って小さいんだな」と思うことがありますよね。それをもっと引きで見ていく。それが鳥の目、月の目だとすると、一方で虫の目もちゃんと描かれていました。「パンにバターがあればいい」というのは虫の目ですよね。虫の目を描く時には、月は月光として現れます。「私は窓の隙間からあの子に差し込んだのです」と月が語ります。引きで見るときは地球を見下ろす目です。視点の移動のダイナミズムがあると思いました。
B：僕が一番好きだったのは、二八夜なんです。特に何もなく短い。海面に白鳥が入っていって去っていくだけ。「『寂しく』飛んで行きました」とあります。「なんで寂しいとわかるのか」と言われそうですが、その辺りがいいなと思いました。自然の、鳥が飛んだり水がはねたり、そんな描写と、そこに月の目線で見たものが書かれています。「寂しく飛んで行った」ように見えたんでしょうね。ストーリーがないのに、この描写だけでこんなに書けるんだというのがすごいと思いました。全編を通して、月の悲しみ、のようなものがあります。そもそも夜しか見えません。自分はいやがおうにも動いてしま

います。地球の自転によって距離が変わっていくということなんだけど。月は夜について全てを自分の範囲を見ています。ある人は自殺することを一度はやめたけれど、やはり自殺してしまう。そんな様子を見るわけです。でも月は介入できないんです。介入しようとしている感じがそこらに書かれています。ちょっと動く。僕らからすると月の光が差したりする。月目線で、「キスをしました」というような表現もあります。

A：月目線だと「すべる」とか「なでる」とか書いていますね。

B：細い路地も角度的に入っていけないかもしれません。入っていけても一瞬かもしれません。そして自殺をしようとしている人を止められるわけでもない。ただただ自然現象として動いている。そして意識がある。それは悲しいなと思いました。10 年間の話もしていました。月だけは変わらずに回っています。見ている景色の対象である人は成長して大きくなっています。これは月目線にしたからこそできる表現なんだよなと思いました。あとは訳によって全然違って感じますね。最初に矢崎源九郎さんの訳を読んでとてもいいなと思いました。

E：谷川俊太郎さんが訳したらどうなるんだろう、とも思いました。いいんだろうなと。

B：でも谷川カラーになってしまう可能性はありますよね。

E：フィットがいいというか。谷川が書きそうなことを書いていますよね。『一億光年の孤独』のような話ですよね。

A：詩的ですもんね。そこは村上春樹ではないんですよね。

E：村上春樹は違いますね。「やれやれ」みたいになっちゃうから。「僕がパスタを茹でていると」と書き出しますね。

A：「僕」は出てきそうです。

E：パスタ茹でがちですからね。ビールも飲みがち。

A：さっき話に出ていた「悲しみ」とか「俯瞰した目線」というところなんですけど、「窓」もキーワードかなと思いました。

B：間に入っているから。

A：そう。常に窓が間に入っていて、見えているんだけど、カーテンを閉められると何も見えなくなります。何もできないんです。たまたまカーテンが開いていたんだ、という話をします。そのときはちょっと嬉しそうに話しているように感じました。でも見えないところがある。どうしようもない時がある。そんな悲しさがあるなと思って読んでいました。

B：かなりはじめにカーテンを閉められてしまったという話をつくったら面白いかもしれないですね。その時、カーテンが閉められました…終わり、という話。

A：視点が地理的に飛んでいく話もありましたよね。

B：中国やインドに行っていますよね。

D：インドに行っていましたね。

B：中国も行っていたよね？

C：行っていました。

A：話の中で飛んでいくのもありましたよね？

B：一つの夜の中でですか？

A：忘れちゃいました。私は途中までそれぞれにオリジナルのタイトルをつけていたんですけど飽きち

ゃいました。
B：どういうこと？第〇夜にタイトルをつけたということ？
A：そうです。
B：あっちに行ったりこっちに行ったりという話ありましたっけ？
C：あったような気がするんですけど、国をまたがっていたか…。アフリカの商人のところに行って…。
B：それってどうやって行けるんだろう。
A：二四夜です。私が思っていたのは二四夜でした。
B：コペンハーゲンから始まって…。バチカン、スフィンクス、ナイル、…そうですね。
A：ここはすごく飛んでいるなと思ったんです。
B：でもこれはおそらく月目線の回想なんですよね。違うか…。
A：その場所を後にして別なところに、とありますからね。ダイナミックな話なんです。
B：月が話したことを聞いてください…やはり訳によって全然違いますね。
D：「月が話したことを聞いてください」と書いてあるんですか？
B：なんて書いてありますか？
D：ここは、「月が物語る話を聞くがよい」とあります。
E：へ〜。
B：全然違う。すごい。山室静訳は「まあ月がどんな話をしたか聞いてください」です。ほぼ同じです。
D：すごく偉そう。「聞くがよい」。
B：最後の三三夜はどうですか？
A：そこ気になっています。
D：すると子どもが答えます。子どものセリフが「おこっちゃいやよ、ママ。あたいね、こんなふうにお祈りしたの。それからパンの上にいっぱいバターをつけてくださいましって。」です。
B：「くださいまし」まではわかるけど、「あたい」って。
C：読み聞かせしたら面白いですね。
B：「聞くがよい」とか「あたい」とか、そういう風味が入っているんですね。
D：「めぐみたまえ」とか書いています。
A：最後って面白い話なんですよね。
B：主の祈りって「この食べ物を与えてくださってありがとうございます」と言いますよね。でも「バターもほしい」って言う。そういう子どものお祈りってあるじゃないですか。ということですよね。
A：私はずっと読んでいて最後どうやって終わるのかなと思っていました。「バターもたくさんつけてくださいましってね！」で終わって、複雑な気持ちでした。不完全燃焼でした。
B：全体のストーリーは無いですからね。
E：僕は『バベル』という映画を思い出しました。アカデミー作品賞でしたっけ？日本とエジプト、何ヶ所かのオムニバスカットです。ストーリーが並走します。それがつながるかというとそうではない。それぞれに悲喜交交がある。この映画で日本人の俳優さんが海外に出たんですよね。
B：菊地凛子さんですね。
E：そうそう。彼女が聾唖者という役でした。オチもなくただ見せていくという語り口が似ていると思いました。

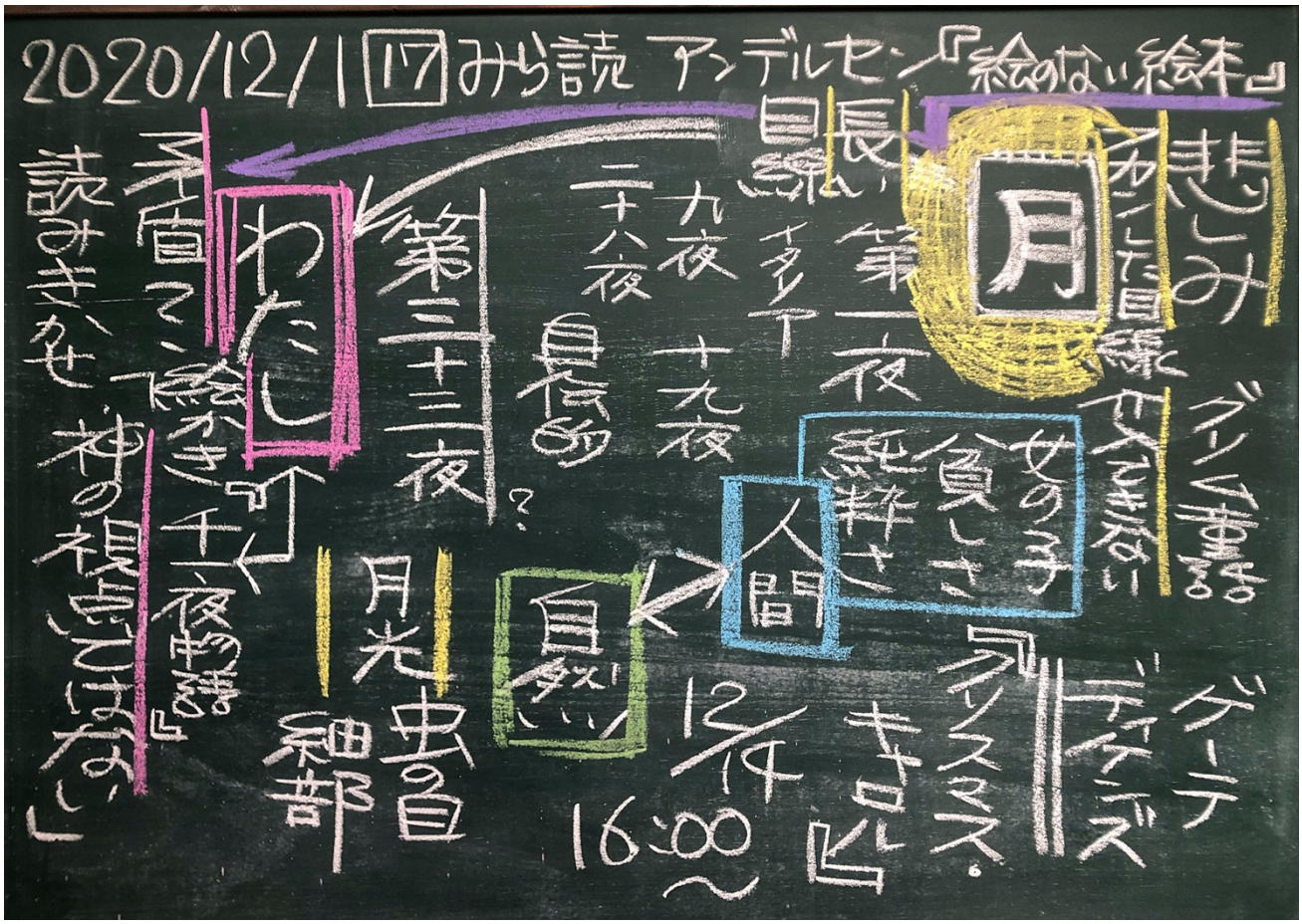
B：なんで『絵のない絵本』というタイトルなんでしょうか。
A：なんでだろうと思っていました。そして「わたし」は画家なんですよね。
E：うんうん。
B：いわさきちひろさんは、絵をつけてしまっているんですよね。矛盾しちゃっています。『絵のない絵本』という絵のある絵本です。なぜこのタイトルなんでしょう。はじめに書いてありましたっけ？
C：わたしの話すことを絵におかきなさいと話しかけてきた、と。これをもとに絵を描いて、と。
B：絵はないけれど、月の語る様子がまるで絵を見ているようだったということ？
E：全ての話が絵画的ではあるんですよね。音というよりは視覚なんです。月は静かに音を立てないイメージですし、絵画的に描写しているのかもしれません。
B：そうすると、やはりこの本に絵をつけてはいけないということですよね…。
E：でも、主人公の立場になると、月が大喜利を出してきたわけです。君ならこれをどうやって絵に描くの？って語りかけていますから。それに対していわさきちひろさんがレスポンスしましたよということであれば、成立はするかなと思います。
A：絵を描かない画家って矛盾していますよね。そういうことを全体として言いたいのかなと思いました。演じない役者も役者ではない。演じられない役者も。そうかなーと思ったけれど、そのようなことがしっかりと散りばめられているわけでもない。
D：私の持っている本の訳がなぜ古いのかと思ったら、昭和 44 年の本でした。
B：そのときは「あたい」だったんですね。
E：子どもといえば「あたい」だったんでしょうか。
D：『積木くずし』とかでしょうか。
B：『積木くずし』はわからないです。
D：不良少女の話ですよね。
B：多分世代じゃない。
D：何言ってるんですか。私も世代じゃないけど。
B：最初に画家としての話を書いているけど、だからといって三三夜で回収するわけではありません。
A：「終わりに」があってもいいはずです。
B：そうですね。しかも序文の最後のところ、不思議な感じで終わりますね。月は毎晩来てくれたわけではない…。そして第一夜。
A：全部月の言っていたことではなく、自分の考えも混じっているとあります。
B：そうなの？月が言った通りに書いたんじゃないの？
A：自分の考えも混ざっていると書いてあります。
B：本当だ。なるほど。
E：面白いですね。
C：よく小説とか童話って「神の視点」で書かれていますよね。上から見ているような視点です。よくそんな書き方をしていますが、この『絵のない絵本』はそうではないんです。全てを知っている視点で書いているのではなく、雲に遮られてしまうんです。そこは面白い部分だと思います。
B：上から見ている目線も、自分の身体性をもっています。だからどうしようもないことがある。「もうちょっと見ていたい」と思っていても、時間が経つとずれてしまう。A さんが言っていたようにカー

テンを閉められてしまう。月の認識、月の視点に、身体性をもたせているのは面白いですね。そこが一番面白いところかなと思います。
A：今のＣさんの話でいうと、「自分が全てを組み立てたわけではない」という宣言がされているということです。「私にも理由はわからない」というようなことです。他の小説ではあり得ない設定です。
C：それをあえて一番はじめに入れているのは、読者に伝えたいことだったのかなと思いました。「神ではない」ということです。面白いなと思いました。
B：二四夜のように「月が話したことを聞いてください」と書いてあるのは、画家である「わたし」が読者である私たちに語りかけている、ということですよね。大体他は「月が話しました」というような感じです。そんな表現の仕方にも違いがあります。
E：最初の文に『千一夜物語』が出てくるじゃないですか。読んでいないのですが、これってアラビアンナイトのことですよね？
B：そうそう。
E：『千一夜物語』は〇夜～として進んでいく物語なんでしょうか。読んでいないのでわからないのですが。
B：読んだことないのでわかりません。読んだことある人いますか？
A：私は無いです。
B：あれってやたらに長いんですよね？
E：いつか読みたいリストには入っているのですが、手が出ないんですよね。
D：アラビアンナイトのなかに、「アラジンと魔法のランプ」が入っているんですか？
B：わからない。
E：いわゆる古典ですよね。
D：アラジンってアラビアンナイトの一部だったような気がする…。
A：アラビアンナイトって「開けごま！」ですよね。
D：開けごま…。
E：そういう冒険談なのでしょうか。
B：ちなみに調べてみると、ちくま文庫だと全 11 巻セットになっています。
E：アラビアンナイトの進め方が第〇夜～というような感じなら、『絵のない絵本』はそれをなぞったのかなと思ったんです。
B：アラビアンナイトってすごく古いんですか？
E：古いと思いますよ。
C：調べると、「枠物語」という分類がされているようです。導入部の物語を外側として、その内側に小さな物語を埋め込んでいる、入れ子構造の物語形式のことのようです。
B：は～。
C：短編が物語の中に入っているということですね。『絵のない絵本』と同じ感じなのかもしれません。
B：『千一夜物語』、手を出す気になれないですね…。
E：古典なんですね。写本がたくさん出てきて…というような記事もあります。
B：どこかでは読んでみたいですね。シンドバッドとか、アラジン、アリババも入っていますね。
D：ふーん。

A：『千一夜物語』ってやなせたかしさんがアニメーションにしていませんでしたっけ？
E：知らない。
A：『アンパンマンの遺言』に書いていたような気がします。不確かな記憶ですが。
E：確かに、『大人の絵本 千一夜物語』という、手塚治虫とかやなせたかしが関わっている本がありますね。
B：他にもあります。…ここも沼ですね。
E：沼です。
B：抜けられなくなる。危ない、危ない。
E：はじめに、のところで、それぞれの月が語った物語を優れた才能に～とありますよね。読みながら、一つ一つで一本の小説が書けそうだなと思ったんです。読みながら、この第何夜を膨らませると一冊の小説になるなと思ったんです。お話しの種を集めたものなんだなと思いました。手塚治虫の『鉄腕アトム』のプルートウという回を、浦沢直樹が 8 巻の漫画にしましたよね。「そういうことをしたまえ」というようにアンデルセンは言っているのかなと思いました。
D：『プルートウ』は面白いんですか？
E：面白いです。
B：大人買いをして読みました。何年か前に。
E：手塚治虫版だと、たった１０ページくらいなんですよね。
B：そうなんだ。
B：では、そろそろ次を決めましょうか。
D：次は『クリスマス・キャロル』なんですよね？
A：そうそう。『クリスマス・キャロル』かなと思っていました。
B：『クリスマス・キャロル』も訳がいろいろあるのでしょうか。
E：多分ありますよね。
B：村岡花子さんの訳があるんですね。村岡花子さんって『若草物語』の？違ったっけ？
E：『花子とアン』ですよね。
B：『赤毛のアン』ですね。『クリスマス・キャロル』、読んだことがある人はいるんですか？
D：ディズニーの。
E：僕もディズニーの映画を見ただけです。アニメーションは良かったです。
A：新しいやつですか？
E：新しいやつ。と言ってももう 10 年くらいになりますが。
B：光文社古典新訳文庫でも出たんですね。三種類あるようです。古典新訳文庫、角川文庫、新潮文庫、あとは岩波少年文庫。
A：『ディケンズ物語』じゃないですよね？
D：『源氏物語』？
A：『ディケンズ物語』。
D：ふっふっふ。
B：『クリスマス・キャロル』は、ディケンズの中では代表作ではないですよね。
E：僕はもうディケンズと言えば『クリスマス・キャロル』だと思っていました。他には…。

B：『デイヴィッド・コパフィールド』とか。『大いなる遺産』とか。
D：『大いなる遺産』聞いたことがあります。
B：有名なのは『クリスマス・キャロル』なんですね。クリスマス・キャロルと言えば稲垣潤一なんですけどね。
D：あー古い。
B：福山雅治が出ていました。
D：え、そうなんですか。
B：福山雅治はあのドラマに出ていたんですよ。
D：へ～。
B：あとは清水美沙。
D：名前が懐かしいです。
B：あのドラマ好きだったな。唐沢寿明。
A：日程はいつにしましょうか。二週間空けると、14 日の週になるかなと思います。
…
A：では 14 日の 16:00～17:00 でお願いします。
B：これで今年は終わりですね。年末に何を読むか考えないと。これですね。『やし酒飲み』。
A：年末年始に『やし酒飲み』いいですね。お正月らしい。
E：「やし酒」っていうお酒があるんですか？飲み物としてあるの？
B：ないらしいです。だってこの本では 10 歳から飲んでるわけですから。いわゆるマジックリアリズムというか、本当には全然ないような話を書く、アフリカとかラテンアメリカの文学にはそんな特徴があるようです。
B：そう言えば、『ガリヴァー旅行記』、とてもおすすめです。
D：島に行くやつですよね。
B：子ども向けのやつはかなりデフォルメされているから、全然違っています。他にも子ども向けと大人向けでは全然違う作品ってありますが、「『ガリヴァー旅行記』が一番違う」という記事もありました。C さん読みましたか？
C：読んでいないです。
B：超絶に面白いです。後半は馬の国に行くんです。
C：小人の国じゃないんですか。
B：最初に小人の国に行って、巨人の国に行って、半身半馬のような国に行くんです。そういう冒険を繰り返すうちに、彼は自分が人間であることに戸惑いを感じてくんです。最後はむしろ馬と繋がりたいと思うんです。馬の国に最後行くんだけど、自分たちよりもよっぽどこの人たちの方が理性的であると思うんです。そして元の世界に帰ってきます。僕らの世界。その世界でいわゆる普通の馬を見て「馬になりたい」と思う話です。当時の社会風刺になっているわけです。そんな作品です。
E：面白いですね。
B：もっとおすすめはこれです。『ドン・キホーテ』。
E：それはいつか読みたいんですよ。
B：これは最高なんだけど、六冊もあるんです。

D：もうお腹いっぱい。
B：『ドン・キホーテ』はすごいですね。
E：読まなきゃと思っていました。面白いんだ。やっぱり。
B：面白いですね。『ドン・キホーテ』を書いたセルバンテスが参考にしたという、『ティラン・ロ・ブラン』という本もあります。これは四冊本なのですが、いわゆる騎士物語です。『ドン・キホーテ』は騎士物語をパロディしている。小説を読んで爆笑したことはこれまでありませんが、『ドン・キホーテ』は「はっはっは」と笑いますね。
A：それは『阿Q正伝』以来ですね。
B：おそらく『阿Q正伝』は『ドン・キホーテ』の流れからですよね。中国の近代文学の初めは『阿Q正伝』だと言われています。おそらく「近代」ってそういうことなんですね。パロディにするということ。昔は伝統だからこういう形式なんだ、とされていた。『ドン・キホーテ』は中世に流行った騎士物語の「男たるものこうあるべき」というものを徹底的に風刺しています。それがあまりにも流行って、セルバンテスではない他の人が続編を書いちゃったんです。『続ドン・キホーテ』を書いちゃった。
D：勝手に。
B：セルバンテスがそれを知って、他の人が書いた続編を自分の書く続編に入れ込んじゃった。というのがすごいらしいんです。セルバンテスのすごさ。
E：ふーん。
B：熱く語ってみました。
A：お正月は二週間以上空くと思うので、次回、多少長くてもいいので「読んでみたい本」を持ち寄って考えるというのはどうですか？
B：いいんじゃないですか。少し長いやつも。
A：多少長くてもいい。薄くてダメなわけじゃないけれど。
D：「映画もあります」というものだといいな。
B：『ガリバー旅行記』はありますよね、映画。『ドン・キホーテ』もありそうですよね。『百年の孤独』の映画はないですよね。
A：なさそうです。
D：最悪はお酒を飲みます。
A：高いお酒ですよね。
B：子ども向けのやつを読んだDさんとディカッションするのは面白いですね。
A：こないだ衝撃的でした。
E：そっちの方がいいっていう。
D：意外とね。
A：そろそろ時間です。ラジオ参加の方もありがとうございました。それではまた。


2020/12/1 17 みら読 アンデルセン『絵のない絵本』
悲しみ
グリム童話
月
ゲーテ
『ティティーズ』
『クリスマス・キャロル』
女の子
負しさ
純粋さ
人間
自然
12/14
16:00〜
長い第一夜
緑
九夜 十九夜
二十八夜
第三十三夜
月光虫の目
細部
わたし
「可」
手首で「絵かき」千一夜の中の話
『読みきかせ 神の視点ではない』